［地域総研紀要　7巻1号, P47－72（2009）（一般論文）］

子どもの育ちと地域社会の在り方に関する一考察
～タイ北部・東北部における描画テストからみえてきたもの～*

入江詩子**・有門　恵***・菅原良子**

A Study of the Relationship between Child Development and the Community
― Results Based on the S-HTP Method in the North and Northeast of Thailand ―

Tomoko Irie, Megumi Arikado, Yoshiko Sugawara

はじめに
第一章　調査の目的と経緯
第二章　地域社会の現状
　第一節　タイ北部パヤオ県ムアン郡
　第二節　タイ北部及びパヤオ県における地域活動の展開
　第三節　タイ東北部コンケン県ノンルア郡
第三章　描画の分析
　第一節　パヤオ県ムアン郡Ａ小学校の状況
　第二節　パヤオ県ムアン郡Ａ小学校の絵の評価
　第三節　コンケン県ノンルア郡Ｂ小学校・Ｃ小学校の状況
　第四節　コンケン県ノンルア郡Ｂ小学校・Ｃ小学校の絵の評価
第四章　子どもの育ちを支えるもの
　第一節　普通に育つタイの子どもたち
　第二節　「普通の発達」を支えるもの
おわりに

《キーワード》
S-HTP法　タイ北部　タイ東北部　子育て支援　コミュニティ

《要　旨》
1980年代から、S-HTP法（統合的HTP法）によって、子どもたちの発達的な変化を研究してきた三沢直子氏は、神戸須磨児童連続殺傷事件を発端に、この年代に生まれた少年による凶悪な事件の報道に触れたとき、『その少し前から、子どもの実態調査のために都内の小学校をまわって描画テストをとりはじめており、そのあまりの深刻な結果に、このような事件がこれから起こるのではないかと、ひそかに恐れていた』と述べ、高度経済成長以降の核家族化とコミュニティの崩壊、また特に、1990年代以降の孤立した育児や早期教育の流行、虐待等の増加などによる子育て環境の質的変化が、子どもの心の発達を停滞させていることを指摘している。

一方、われわれが長年かかわってきたタイ北部および東北部では、貧困による家庭崩壊、HIV感染によるエイズ遺児の出現などにより、子どもが厳しい環境の中で育たざるをえない状況にある。そのような困難な状況が、子どもたちの心にどのような影響を与えているのかを明らかにするために、三沢氏の協力のもと、パヤオ県、コンケン県の４つの小学校において、S-HTP法による描画テストを試みた。その結果、家庭状況に何らかの問題を抱えていると判断される子どもであっても、心の発達は順調であることがわかった。この背景には、上座部仏教の宗教規範を基盤に、農村部の伝統的なコミュニティ、あるいは社会開発によって再構築されたコミュニティのなかで、地域の住民が日常的に、年代を越えて相互行為を行っている状況と深く関連すると思われた。

はじめに

1997年（平成９年）神戸須磨児童連続殺傷事件が発生し、当時14歳の少年が逮捕され大人社会に衝撃を与えた。また、この少年と同じ1982年に生まれた子どもが、17歳になって次々と無差別的な殺人事件を起こし、子どもたちの心の闇の問題に関心が集まった。

1980年代から、S-HTP法（統合的HTP法）[1] によって、子どもたちの発達的な変化を研究してきた三沢は、この年代に生まれた少年による凶悪な事件の報道に触れたとき、『その少し前から、子どもの実態調査のために都内の小学校をまわって描画テストをとりはじめており、そのあまりの深刻な結果に、このような事件がこれから起こるのではないかと、ひそかに恐れていた』と述べ[2]、高度経済成長以降の核家族化とコミュニティ[3]の崩壊、また特に1990年代以降の孤立した育児や早

* Received February 10, 2009
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　地域づくり学科
*** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　国際交流学科

期教育の流行、虐待の増加などによる子育て環境の質的変化が、子どもの心の発達を停滞させていることを指摘している[4]。

また、門脇は社会学の立場から、最近のわが国の子どもや若者にみられる変化に関して、『他者への関心や愛着や信頼感がなく、自分が住む生活世界について具体的なイメージを描けないということは、社会を作り維持していくために必要な何かをなくしていることではないか』[5] と、世帯規模の縮小、家族間の相互行為の減少、コミュニティの衰退、学校における子どもたちの共同性の喪失、ヒトの排除が進む生活空間の拡大等によって、子どもの社会力[6]が低下したことを指摘している。本学においても、ここ４、５年の間に大学生の質的変化を感じる。とりわけ、授業で家族画を描く課題に取り組ませたとき、輪郭すら描けずに数十分間紙面に向き合っている学生が出現し、彼らが育ってきた社会や家庭の環境と、それによって彼らが抱える心の問題の大きさを感じざるを得なかった。

このような日本の子どもや若者の危機的状況に対して、われわれの社会は『子育て支援』や『少子化対策』、『次世代育成』という冠のついた取り組みを始めており、本学においても、平成16年から諫早市の委託を受けて「子育て支援サポーター養成講座」を開催している。子育てをめぐる問題の広がりや深刻さを、ひとりでも多くの市民に理解してもらうことから始め、子育て中の母親へのサポート、学童期・思春期の子どもたちへのサポートを見据えて、しばらくは試行錯誤が続くものと思われる。

一方、開学以来、毎年本学でコミュニティサービスを実施しているタイ北部および東北部では、主たる産業が農業であることや、タイの村落形成過程において、開拓者が親族を呼び寄せて形成してきたという経緯もあり、いまだにコミュニティが機能しているものの、貧困に起因する児童売買やHIV感染によって、問題を抱えた家族が数多く暮らしている。

エイズでやせ衰えて死にゆく両親を家庭で看取るだけでも、子どもたちの心には深い傷が残るはずである。実際に筆者が出会った少年は、何年もかかって笑顔を取り戻した。「自分も親のように死んでしまうのではないか」という恐怖や、貧困と闘いながら子ども期を過ごす子どもたちの心はどのように育っているのであろうか。また、HIV感染拡大以来、NGOと行政が協働で実施してきた社会開発では、地域ぐるみで子どもを受け止める活動も展開されており、子どもたちのなかには、家族や親族、近隣、学校以外に、HIV感染者やNGO職員、また我々のような外国からの訪問者などとの相互行為[7]に恵まれた環境で育っている子どももいる。このような状況は、子どもの心の育ちに何らかの影響を与えているのであろうか。また、その成果は、日本社会の子育て支援に還元できるものなのであろうか。

以上のような問題意識のもとに、本稿においては、２つのフィールドと４つの小学校にご協力をいただいて描画テストを実施し、三沢氏のご協力をいただきながらその結果を分析し、子どもの育ちと地域社会のあり方に関して考察を深めることとした。

第一章　調査の目的と経緯

先に述べたように、本学がコミュニティサービスを実施しているタイ北部では、HIV感染拡大以来、NGOと行政が協働した社会開発事業がいくつか実施され、感染者が主体となった子ども活動も展開されており、子どもたちのなかには、家族や親族、近隣、学校以外に、このような活動に参加して、HIV感染者やNGO職員、また我々のような外国からの訪問者などとの相互行為に恵まれた環境で育っている子どももいる。一方、地理的気候的条件のため、より深刻な貧困に見舞われている東北部では、日本の大分県に倣って、タイ政府が推奨しているOTOP[8]とよばれる一村一品運動による内発的な経済開発が進められている。

いずれにしても、主たる産業が農業であることや、タイの村落形成過程において、先発の開拓者が親族を呼び寄せて森を開墾し、村を形成してきたという経緯もあり、いまだにコミュニティが機能しているものの、貧困に起因する児童売買やHIV感染、長期にわたる出稼ぎ、不安定な婚姻関係等によって、問題を抱えた家族が数多く暮らしている場所でもある。

個々の家族問題の深刻さは、日本の状況をはるかに越えており、少なからず子どもの心の発達に影響を与えているのではないかと思われる。そこで、われわれは描画テストによって子どもの心の発達の状態を把握して、そこにどのような家族やコミュニティの影響があったのかについて分析するため、三沢直子氏のご助言のもと、2008年９月21日から26日に渡って、以下のように、北部と東北部の２つの県の４つの小学校で描画テストを実施した。

パヤオ県
　Ａ行政区Ａ小学校
　　５年生24名（男子13名、女子11名）
　　６年生26名（男子12名、女子14名）　計50名
　Ａ行政区Ｄ小学校
　　６年生16名（男子11名、女子５名）　計16名
コンケン県
　Ｂ行政区Ｂ小学校
　　６年生７名（男子４名、女子３名）
　　５年生９名（男子３名、女子６名）
　　４年生12名（男子６名、女子６名）　計28名
　Ｃ行政区Ｃ小学校
　　６年生30名（男子17名、女子13名）　計30名

なお、Ｄ小学校の描画に関しては、強圧的な担任の影響を受けて、攻撃性が強く現われたと思われる絵が多かったために、今回の分析からは外した。北部の調査については、入江と菅原が担当し、東北部については有門が担当して行った。北部の調査にご協力いただいたのは、ラックスタイ財団[9]（以下RTF）パヤオ事務所およびＡ行政区のHIV/AIDS当事者（以下PHA：Person With HIV/AIDS）グループ、東北部の調査にご協力いただいたのは、コンケン県のアジアン・スカラーズ大学（以下CAS）である。

調査は、Ａ４の上質紙、HBの鉛筆２本、消しゴム１個を各自に配り、紙は横にして使うよう指示した後に、「家と木と人を入れて、何でも好きな絵を書いて下さい」という教示によって開始した。また、①絵の上手、下手を見るのではないこと、②ただし、いい加減ではなく、出来るだけ丁寧に描く、③写生ではなく、思った通りに描く、④時間は自由である、⑤となりの人の絵を見たり、邪魔したりしない、という注意を付け加えた[10]。東北部のＢ、Ｃ小学校では、紙面に枠を定規で引いてから描く子どもが多かったが、あえて最初の教示以外は行わなかった。この点に関しては、「日本には〈枠づけ法〉という技法があるので、分析の際は考慮する必要がある」と、後に三沢氏から指摘を受けた。また、Ａ小学校では、５、６年生を同時に行うために、５年生は教室ではなく、２階の広い板張りの廊下に座って描いたため、多少書きづらさがあったのではないかと思われる。

我々は、教室や廊下の隅に通訳の方とともに机を並べ、書き終えた順に子どもたちに絵を持ってきてもらい、「家の中にはだれがいるのか」「人物はだれか」など、いくつか質問をして記録した。30分ほど経過すると次々と子どもたちが絵を持って並び始め、２時間半ほどかけてインタビューを終了した。インタビュー終了後、子どもの絵を担任の教師に見ていただきながら、個々の子どもたちの家庭状況や学校での様子を聞きとって記録した。教師は広域な異動がほとんどなく、長く同じ学校に勤め、学校に近い所に住んでいるという方が多かった。そのため、子どもたちの家庭状況もよく知っておられた。

また北部では、サポートをしてくれたNGO職員や、PHAグループのメンバーからも、出来るだけの情報を得るように試みた。とりわけ、彼らの家の近辺に住んでいる子どもの家庭状況はよく把握しており、教師が知らない情報も多く得ることができた。帰国後、わが国におけるS-HTPの第一人者である三沢氏に子どもたちの絵を見ていただき問題のある絵についての判断を仰いだ。

第二章　地域社会の現状

第一節　タイ北部パヤオ県ムアン郡

⑴　パヤオ県の位置と人口[11]

パヤオ県は、17あるタイ北部の県の中のひとつで、バンコクから735㎞に位置し、タイ北部の文化・経済・観光の最大の都市であるチェンマイ市から車で２～３時間のところに位置している。

タイの地方行政区分は、広域行政単位として県（チャンワット）があり、その下に郡（アンプー）がある。郡はさらに行政地区（タンボン）、村（ムーバーン）と分かれており、パヤオ県は７つの郡と２つの分郡、その下に68の行政地区と802の村からなる人口約50万人、世帯数約14万５千世帯からなる地域である[12]。男女比はほぼ同じで、年齢別の人口は、０歳から14歳が22.3％、15歳から59歳が66.5％、60歳以上が11.2％となっており、15歳から59歳の働きざかりの世代が６割以上という人口構成になっている。本稿で対象とするＡ行政区はパヤオ県の県庁所在地があるムアン郡（パヤオ市）にあり、ムアン郡（パヤオ市）の人口は125,450人（男性62,202人、女性63,248人）となっており、世帯数は、36,349世帯となっている。１世帯あたりの家族数は、3.4人である。

⑵　タイ北部及びパヤオ県の産業と経済状況

タイ北部の主要な産業は農業であり、「Population and Housing Census 2000年」によれば、パヤオ県での15歳以上の労働者のうち、農業に従事している者が71.7％を占めている。

また、2002年のタイの一人あたりの所得（月額）は3,913バーツ（１バーツ＝約2.6円、2009年１月現在）、タイ北部の一人あたりの所得（月額）は2,963バーツとなっており、タイ北部は全国の76％の所得しかないことがわかる。これをバンコクと比較すると、バンコクの一人あたりの所得（月額）は8,509バーツとなっており、タイ北部はバンコクの34.8％の所得しかなく、都市と地方の格差が大きいことがわかる[13]。

その中でも、パヤオ県の１日あたりの最低賃金は、150バーツとタイの中でも最低レベルとなっており、バンコクの203バーツと比較すると、４分の３程度になっている[14]。以上からもわかるように、タイ北部は、東北部とならんでタイの中でも貧しい地域であり、筆者らが行った家庭訪問における聞き取り調査からも[15]、自分の畑を耕すほか、食用のカエルなどを養殖して市場で販売したり、自分の家で採れた野菜などを調理したものを市場で販売したり、１日300円程度の日雇い仕事などをしたりして、何とか生活している状況が明らかになっている。また、経済的に厳しい状況の中、バンコクとの所得格差は、タイ北部からバンコクへの出稼ぎを促す要因となっており、親が子どもを祖父母や親戚などに預け、バンコクのような都市部や海外へ長期で出稼ぎに出かけている家庭も多く、親が不在の中で生活をしている子どもも多くいる。

⑶　タイ北部及びパヤオ県における地域問題

上述したように、パヤオ県における大きな問題の一つとして貧困の問題があげられる。貧困の背景には家族の居住形態や相続のあり方も影響していると思われる。タイ北部では、伝統的に結婚後夫が妻の家に移り住む妻方居住性が規範であり、男性が妻の両親のもとに来て、両親の家族と娘の家族が同居することになる[16]。娘が何人かいる場合は、下の娘が結婚すると、上の娘夫婦は両親の家からは出るものの、同じ敷地内に家を建てて移り住むことになる。それが繰り返され、最終的には末娘が夫とともに両親の面倒を見ながら家を相続する。タイでは一般的には均分相続ではあるが、タイ北部では、結婚後も両親と一緒に住む末娘が家屋を相続する場合が多いとされており、家屋以外の不動産は、両親の近くに暮らし、両親を扶養する責任を負っている末娘を含めた姉妹が相続することになる。男性は婚姻時には自分の家を出て行くことになるため、不動産の相続権は放棄し、金品や物品などの動産を与えられることが多いとされている。このように、タイ北部では、何世代にもわたり相続による土地の分割をしてきたため、だんだんと土地が狭くなり、結果として土地を売却してしまうこともある[17]。しかしながら、相続すべき土地がなくなっても、娘が両親を扶養するという社会的責任は残るため、女性が一家を支えるために出稼ぎに行くことも珍しくない[18]。このような背景があり、上述したように結婚前の若い時だけでなく、結婚後も子どもを祖父母に預けて、両親がバンコクや、バンコクまでは行かずともタイ北部の都市であるチェンマイなどに出稼ぎに行っている家庭は当たり前のように見受けられる。

一般的に低学歴な北部農村出身の出稼ぎ労働者が従事する仕事は、男性は製造業や建設作業員などの肉体労働、女性は性産業が主である。1880年代から、1997年のタイの通貨危機から始まったアジア通貨危機にいたる前年の1996年までは、タイの経済発展は著しいものであった。この時期に都市へ出稼ぎに行った若者たちは、1984年にタイで初めて感染の症例が報告され、1980年代末に急激に感染者が増加したエイズの問題の渦に飲み込まれていくこととなった[19]。1984年に初めてのHIVの感染者が確認されたタイでは、その後、同性愛者―薬物中毒者―売春婦・買春者―家庭内―母子という経路でHIV感染が拡大していった。HIVに感染した出稼ぎ労働者は、感染が発覚して解雇されたり、発症して健康状態の悪化から働けなくなったりして故郷に戻らざるを得なかった。また感染の事実を知らずに故郷に戻って家庭を持ち、子どもが生まれた後に感染の事実が発覚したりなど、1990年代に入るとエイズ問題は出稼ぎ労働者の故郷である地方へと波及し、さらなる貧困問題を引き起こすことになった。

パヤオ県にもこの状況は当てはまり、1990年代にはパヤオ県はエイズ問題が深刻とされたタイ北部の中でも、HIVが一般住民の間に最も広がり、深刻な状況に陥った地域である[20]。パヤオ県で最初のPHAが報告されたのは1989年であるが、この年１名のエイズ患者と６名のHIV感染者が確認された[21]。翌年1990年はPHAあわせて５名であったが、1991年は34名、1992年には138名、1993年には407名と急激に感染が拡大していったことがわかる。1997年には1,819名までに増加し、最も多い年となったが、翌年以降から徐々に減少し、2005年には701名となり、ピーク時の39％にまで減少している。エイズによる死亡者数も1989年の

１名から、翌1990年は２名、1991年には11名、1992年には48名、1993年には109名と増え続け、最も多い1995年には619名となっている。その後は、増減を繰り返しながらも徐々に減少し、2005年には159名となっている。

エイズによる死亡者の多くは、働き盛りの世代でもあり、この世代の死亡者数の増加は地域や家庭に深刻な影響を及ぼした。親がエイズを発症した子どもは、エイズ患者の家族ということで受ける差別や、主な働き手であった世代がエイズにより倒れ、収入が減少しこれまでの生活が成り立たなくなるという経済的な問題を抱えながら、病気が進行し衰弱しながら亡くなっていく親を見届けた。タイの農村社会では、両親が亡くなった子どもを、祖父母や親戚などが引き取り育てていることも多く見受けられる。親をエイズで亡くした子どもの精神的ショックは大きく、何らかのケアが必要とされるが、もともと経済的に厳しい生活を送っている状況では、引き取った子どもの心理的なケアまで行うことが難しいことは容易に想像できる。

タイ政府は、1988年から予防対策に乗り出すものの、予防対策が始められた当初は、テレビなどのメディアを使い、エイズが不治の病であり、悲惨な病気であることを強調したキャンペーンを行ったために、住民は混乱に陥り、感染者に対し恐怖を抱いた。商売をしている感染者は品物を買ってもらえなかったり、地域の行事に参加ができなかったり、葬式が出せなかったりなど、感染者は地域から疎外され差別され、家族と一緒に過ごせない感染者もいた[22]。以上のように、急激なエイズの感染拡大は、村から人がバタバタと病に倒れ、主要な働き手が亡くなるという問題のみならず、残された家族の経済的、心理的問題を引き起こし、地域を混乱に陥れることとなった。

第二節　タイ北部及びパヤオ県における地域活動の展開

⑴　タイ北部における地域活動の展開

以上のように、エイズ問題は地域住民を恐怖と混乱の渦に陥れ、感染者は地域から差別され、家族にも受け入れられず、治療も受けられないなど何のサポートも無く、薬草や伝統医療などに頼る状況が続いていた。このような状況の中、1992年にはこれまで女性問題に関わっていたNGOが集まりエイズ問題に関する議論が行われるなど[23]、1990年代に入りタイ北部では、NGOが協働してエイズ問題に取り組み始め、NGOの支援を受けながら感染者自身による自助グループづくりが進められ、感染者グループのネットワークも結成されるなど、活発な活動が展開された[24]。

タイ北部においては、1970年代には海外とのつながりのある青少年組織（YMCAやガールガイド）がタイ北部の最大都市であるチェンマイに出稼ぎに来ていた少女たちを対象に「慈善型開発」タイプの支援活動が既に行われていた[25]。1980年代に入り、外国の資金援助の下、貧困問題に取り組むための収入向上や人材育成をめざした農村開発のためのさまざまな事業が開始されるようになった。この頃の活動は、地域のニーズを十分に反映していない、住民の自立を阻害する、計画性がないなどと批判された「慈善型開発」タイプから、NGOが地域のニーズを受け止め、その問題を解決するために、外部から人材や資金を村に持ち込む「技術移転型開発」のスタイルに移っていた。また、1990年代以降注目される参加型開発のアプローチも試みられていた。

1987年、タイ政府による工業開発と観光開発に重点をおいた「第６次経済社会開発計画」が施行されると、タイは急速な経済成長を遂げ、その影響はタイ北部にも及んだ。工業化や観光開発が進められ、環境破壊が進行し、政府の経済中心の開発とは違うNGOが目指した「オールタナティブな村づくり」は、村人主体の参加型開発を「上から」推進するという矛盾を抱えていたこともあり、行き詰まりをみせていた。急速な経済成長の影響を受けるとともに、NGOによる村づくりが壁にぶつかっていたその時期に、地方の農村地域はエイズ問題の渦にまきこまれていくこととなる。

既に述べたように、タイ北部では1990年代に入り、エイズ問題に関していくつかのNGOが議論を行ったり、また感染者の自助グループが結成されNGOが支援を行ったりするなど、エイズ問題に関する取り組みが行われ始めていた。エイズによる死亡者が急増し、多くの住民や家族がその問題に直面した1990年代後半になると、エイズの問題は個人の問題ではなく地域の問題であるという意識がみられるようになり、感染者自助グループの活動が感染者のみの活動ではなく地域の活動として広がりをみせるとともに、NGOの活動も参加型学習の手法を取り入れ、感染者ネットワークと住民組織の支援を行うようになるなど新たな展開をみせていった。

⑵　パヤオ県における地域活動の展開

上述したエイズ問題に関する取り組みは、パヤオ県においても当てはまる。パヤオ県は、エイズの問題が深刻化したタイ北部の中でもエイズ感染者が多いとされ、エイズ問題による影響が大きかった地域であるといえる。以下、NGOがタイ北部でエイズ問題に関する支援活動を始めた当初からパヤオ県で活動を展開していたRTFが、どのような地域活動を行ってきたのかについてその概要を述べたい[26]。

RTFは、前述したように1979年に世界最大規模の国際NGOであるCARE Internationalの開発途上国現地事務所の一つCARE Thailandとして1979年に発足し、その後、1997年にタイ政府の認可を受けて財団化し、CARE Internationalから独立してつくられたNGOである。これまでに、農村開発、家内工業育成、環境保全、山岳民族開発事業、エイズ予防および共生教育、全国各地の学校での環境・衛生・エイズ教育の副読本プロジェクト等の事業を実施している。

RTFがパヤオ県で活動を開始したのは1993年からである。1994から1998年にかけてチェンマイ、チェンライとともにパヤオでも「Living With AIDS Project」が展開され、保健省の職員、コミュニティ・ヘルスボランティア（日本の民生・児童委員にあたる）、RTFスタッフが協力して地域をサポートする体制づくりが進められていった。具体的には、HIVに感染した人へのエイズ教育や、コミュニティ・ヘルスボランティアに対してエイズ患者やその家族にとってどのようなケアが必要なのかについてのトレーニングを行い、家族に対しHIV感染者のケアをどのように行ったらいいかを教えたり、エイズ患者や家族の相談にのったりできるようにしたのである。また、地域のリーダーには、PHAやそれを支援する人々の活動に対し、どのように支援をすればいいのかについて教え、その体制づくりをすすめていった。その後の1998年から2003年にかけては、国際協力機構（JICA）による「タイ王国エイズ予防・地域ケアネットワークプロジェクト」が、タイ保健省、パヤオ県保健局を関係機関として実施されると、RTFもこのプロジェクトに参加し、フィールドレベルでの活動を実施した。この頃になるとRTFの事業の対象は、エイズの影響を受けた家族から地区自治組織や地域リーダー、PHAグループなどへと変わり、病院や保健センターのスタッフなど政府機関を対象に、地域の組織が自立して活動していくために必要な「問題分析」「プロジェクト管理」「資金集め」「資金管理」などのトレーニングやHIV/AIDSやケアの仕方に関する知識を身につけるために専門家を招いてトレーニングを行うなど、地域の状況に合わせて必要なトレーニングや活動を参加型開発の手法で行った。

また、RTFは2001年度からエイズ遺児支援のための活動も開始している。親をエイズで失った子どもへの奨学金支援や、絵画・刺繍・Ｔシャツづくりなどを通した心のケアとスキル獲得のための活動、子どもが作った物の商品開発、ワークショップの手法を用いた子どもによる社会調査とその成果発表、異文化体験学習、交流を目的とした合宿など子どもたち主体に参加型で活動を実施する「コドモファンド」を開始したのである。「コドモファンド」は、今回描画テストを実施したパヤオ県ムアン郡A行政区とジュン郡において展開され、その活動はRTFのスタッフやPHAの有償・無償ボランティアや若者グループが中心となって実施された。当初はボランティアの家や村役場などを使って行っていた活動も、地域に認められるようになると村長や村の長老、僧侶などの村人たちの協力により、お寺の脇の集会所などを提供してもらえるようになり、専用の活動場所を確保するなど活動の広がりをみせていった。現在、「コドモファンド」の活動は、上記の2箇所に加えドッカムタイ郡とジュン郡にもう1箇所の合計4箇所で実施されている。各地区の活動は、RTFの支援のもと、活動の中心となるPHAグループのボランティアが考え実施されている。その活動内容は、子どもたちが活動に参加することで知識やスキルを身に付け、自己表現ができるようになり、自信をもつことができるような内容になっている。今ではエイズの影響を受けている子どもたちだけでなく、地域の子どもたちも活動に参加するようになるなど、地域に広がりをみせている。

第三節　タイ東北部コンケン県ノンルア郡

東北部はイサーンと呼ばれ、タイのなかでも最も所得が低く自然資源も乏しい地域であるとされている。その東北部は全19県からなり、タイ総人口の約34％、またタイ全土の約３分の１の面積を占めている。そのひとつであるコンケン県は首都バンコクより約500㎞北東に位置し、絹製品の生産で有名な地域である。2008年６月１日適用の各県別日額最低賃金をみてみると、最高水準であるバンコク都他5県は203バーツであるが、コンケン

ノンルア郡Ｂ村

ノンルア郡Ｃ村

県はそれより49バーツ低い154バーツであった[27]。全76県の最低賃金の平均は162バーツとなり、ナコンラチャシマ県を除く東北部の全県がこの水準以下であることからも所得水準が比較的低い地域であることが確認できる。

東北部における主要な産業は農業であり、農業人口は全国のおよそ半分を占めている（表１参照）。代表的な農作物は米であるが、その他サトウキビやキャッサバを中心に栽培している地域である。しかし、乾燥した高原台地で土壌の質は決して豊かとはいえず、地表面は砂質固結土で降雨が深部まで浸透しやすく保水に適していない。さらに、地下水や土壌には塩分が含まれているため、他の地域と比較すると生態環境に恵まれておらず農業

表１　農業経済指標（2001／2002年）

	農家世帯数（万戸）	農業人口（万人）	純農業収入（ドル）	灌漑比率（％）
東北部	273	1,246	334	9.3
中央部	81	370	1,655	55.3
全　国	566	2,504	722	23.5

出所）「タイ東北部における農民のリスク分散行動」http://www.nochuri.co.jpより抜粋。

生産性が低いのである[28]。要するに、投入労働力を増加させても米の生産性は低いうえ灌漑設備が整っていない地域も多く、農業用水は天水依存のため２期作が困難と悪条件ばかりが目立つのである。

年間の準農業収入でみても、土壌や設備に恵まれている中央部1,655ドルに比べ東北部では約80％も低い334ドルとなっている（表１参照）。農業に依存しながらも、農業からの収入ウエイトが低いのが東北部の構造であり問題であるとの指摘もある[29]。さらに、国内外への出稼ぎなどの農外収入への依存度が高く、大量の出稼ぎ労働者を送り出していることもこの地域の特徴といえよう。

１．Ｂ行政区

コンケン市中心部から38㎞に位置するのがＢ行政区Ｂ村で、総人口は779人（男365、女414）、総世帯数は145世帯である。小学校は描画テストを実施したＢ小学校のみで、中学校以上の教育機関はない。全世帯が農業従事者であり、農閑期は近郊の履物工場に勤務し農外収入を得て生計をたてている。農業に従事しているとはいえその多くが小作農で収入は限られているため、父親がバンコクなどへの出稼ぎ労働をしているという家庭もある。出稼ぎ労働者の多くが北部や東北部の出身者であるが、北部パヤオ県で問題ともなっているHIV感染者はこの村では確認されていない。なぜなら、出稼ぎ労働者としてバンコクへ行くのは父親が多く、建設作業員やタクシードライバー等の職種に就くことが主であることからHIV感染の危険性が低いのではないだろうかということが考えられる。また、Ｂ小学校の調査対象となった４～６年生28人のうち３人の父親だけがバンコクへ出稼ぎに行っていた。これは、Ｂ村の近郊には大規模な履物工場があり、農外収入を求める労働者の受け皿となっているからであるともいえよう。各世帯における生活等に関するアンケート調査が実施できなかったため、正確な生活実態や家計状況は把握できていないが、一般的に貧困層とよべる家庭がほぼ全体を占めている。

また、住居は伝統的な高床式住居が多く、なかには木造家屋もあるが屋根や壁がトタンで造られた家が目立ち、窓が取り付けられていないのも決して珍しくはない。村内の道路は舗装されてはいるが、水牛や鶏の尿糞が放置され、排水が道路わきへ流出しており衛生面においても指導あるいは改善が必要と思われる。さらに、生活の質の向上や貧困削減を目指したNPOやNGO、国際機関な

どによる社会開発が手付かずの状態であるばかりか、地域間格差の解消や草の根主導型のコミュニティ開発を目指し農村を中心に展開をみせているOTOPすら実施されていない。

しかし、村人やＢ小学校の先生に話を伺ったところ、物質的に豊かではなく生活が苦しいことに違いはないが、それなりに平穏な生活を送っているとのことであった。また、村長によると、集落の住民は各家庭の家族構成や暮らしぶりという生活状況を互いに理解し、協力し合い助け合いながら暮らしており、問題が生じたときには住民全体で解決へ向けて取り組んでいるという。充足感や連帯感のある他者とのかかわりをもつ地域であり、いわゆる相互扶助が成りたっているコミュニティの存在が確認できる。OTOP導入や人的資本の活用という観点、さらには収入を安定させ生活の質の向上を目指すものと考えると望ましいかもしれないが、伝統を重んじ近隣住民との連携をもち生活している地域であることを考えると急務に開発に着手すべきかどうかの判断は難しい。

２．Ｃ行政区

もうひとつの調査対象となった小学校がＣ行政区にあるＣ小・中学校である。Ｃ行政区は10村で形成されており、そのうち７村で暮らす子どもたちがＣ小学校へ通っている。人口862人170世帯のＣ村、697人132世帯のＤ村、人口652人123世帯のＥ村、人口642人126世帯のＦ村、人口429人95世帯のＧ村、人口386人76世帯のＨ村、人口314人67世帯のＩ村の７村である。

この行政区で暮らす約90％の世帯が農業あるいは漁業従事者であり、このうち２村ではOTOPに積極的に取り組んでいる。OTOPとは、2001年よりThaksin Shinawatra元首相が率いるタイラックタイ党が、大分県の一村一品運動を模範とし農村の伝統的小規模零細工業の育成を通じて零細農業家の現金収入の増加、地域の活性化を目指した政策である[30]。OTOP登録のためには、生産者グループが指定期間内に内務省コミュニティ開発局（Community Development Department）郡事務所へ申請書と製品を提出し認定を受けなければならないとされている。

OTOPグループ参加者の中心は余暇を利用した女性といわれているが[31]、Ｃ行政区で最も大規模に取り組んでいたものは女性を中心としたものではない。76世帯あるＨ村のほぼ全世帯が一家総出で取り組んでいるのが漁業と魚の加工業である。この村はウボンラットダムの貯水地に面しており、OTOPに登録以前から干物やパラーとよばれる調味料をはじめ、魚のすり身を発酵させたネムプラ等をつくっていたが、各家庭で消費する程度の量であった。OTOP登録後に道路も舗装され、他村から車で買いにくる人も増え、さらに市場へのアクセスが容易くなったことから毎日市場へ商品を運搬することが可能となり生産量は一気に増加したという。参加グループの数軒でインタビューを行ったが、全員からOTOPグループに参加してからは収入が安定し、暮らしが豊かになり満足しているとの回答が得られた。

Ｃ行政区はＢ行政区から距離的にはさほど離れていないものの、Ｂ村より豊かな生活を送っている世帯が多いという。もちろん、OTOPグループに参加することにより安定した収入を得ることができる家庭が増えたこともあるが、Ｂ村より出稼ぎが多く、バンコクばかりか韓国や台湾といった海外出稼ぎが目立つのもこの行政区の特徴である。要するに、出稼ぎ家族の仕送りによっても物質的に豊かな家庭が増えてきていると考えられる。調査対象となった６年生30人のうち７名の生徒は父親あるいは母親が出稼ぎしており、海外あるいはバンコクへ出稼ぎしている親をもつ生徒は約23％にものぼることからも出稼ぎ率が高いということが確認できよう。

第三章　描画の分析

第一節　パヤオ県ムアン郡Ａ小学校の状況

Ａ小学校

Ａ小学校は、パヤオ県ムアン郡Ａ行政区に２つある小学校のうちの一つであり、人口1,100人ほ

Ａ小学校

どのＡ村に位置している。Ａ行政区では1990年代の終わりから、行政・NGO・住民による地域共同体を基盤としたHIV感染者とその家族を中心とした社会開発プロジェクトが始まっており、ここ10年ほどの間に人間開発をベースにしたさまざまな活動実践を経て、HIV感染のみならず社会開発の意義などに対する住民の意識に変化がみられる地域である。

全校児童は、年中からの幼稚園児を含めて136名在籍しており、この行政区を構成している９か村のうち、６か村から通ってくる子どもたちである。サッカー場２面ほどの広い芝生の運動場の奥に木造二階建ての質素な建物があり、そばには幹線道路が走っている。半径１キロほど周辺には、行政区の保健センター、行政区委員会議場、保育園、大きめの寺院等が存在しており、この行政区の中心に位置するものと思われる。

今回調査にご協力いただいたのは、５年生24名、６年生26名である。どちらのクラスも担任は女性であるが、６年生担任は、独身で長年この学校で熱心に児童の指導に当たってこられた方である。50名の児童のうち、両親と暮らしていると確認出来ている子どもは50％、両親と暮らしていると推察できる子どもは16％、両親またはどちらかの親が出稼ぎに行っている子どもは12％、どちらかの親が亡くなっている子ども６％、親が離婚している子ども14％、祖母が面倒を見ている子どもは10％であった。

ここパヤオ県には、ヤオ族、モン族、リス族などの山岳民族も定住をしており、貧困問題が大きい県として知られている。もともと精霊信仰が強かったこの地域でも、山岳民族の定住化過程において、学校教育や地域の僧侶を介して仏教規範が一般的に内面化されており、この県でも子どもが親の恩に報いるために働いて送金し、親を助けるという文化が継承されている。そのため、中学校義務化以前には、小学校高学年を修了するとバンコクに出稼ぎに行く子どもが多く、民族的に容姿端麗なため、国内外を問わず性産業に吸収される女性も数多く輩出しており、村を歩くと、出稼ぎ先の国の家を模して建てた、周辺の田舎風景になじまない豪奢な家もしばしば見受けられ、揶揄的にアメリカンハウスや、ジャパンハウスなどと呼ばれている。

タイでHIV感染が確認され、社会問題化した1990年代に入ると、出稼ぎ先でHIVに感染し働けなくなって帰郷するケースが後を絶たず、30代から40代の働き盛りの男女が年老いた両親や幼い子どもを残して数多く亡くなっている。そのため貧困問題がさらに深刻化し、HIVによって多くの人々が影響を受けた[32]。当然ながらこの小学校にも、親や親せき、母子感染した兄弟などをHIV/AIDSで亡くすなど、何らかの影響を受けた児童が大変多く、少数ではあるが本人自身がHIVに感染しているという児童も在籍している。また、両親が健在であっても、二人とも、あるいはいずれか片方が出稼ぎに行っている家庭も多く、また、離婚も一般的で、再婚率も低くはなく、祖父母や親せきとともに暮らしているケースも数多く見受けられた。

各々の村は、親族がおなじ敷地内に家を建てて住んでいるところもあれば、他村から夫婦ともに移住してきた核家族世帯などが入り混じって住んでいるところもある。住居は伝統的な木造の高床式の家もあれば、コンクリートの一階建ての家もあり、出稼ぎによる仕送りで、通常の収入には到底見合わない立派な家に住んでいる世帯もある。タイでは日本の正月にあたる、ソンクラーンと呼ばれる水かけ祭が行われる４月が一番暑い時期で、この時期は連日うだるような暑さが続く。しかしながら、よほど裕福な家庭でない限りエアコンは設置されておらず、多くの家は、網戸もないため就寝時は蚊帳を用いる。防犯の鉄格子に木の扉のついた窓が一般的であり、通風に配慮してある半面、家の様子は隣近所に筒抜けである。隣家で何が起こっているのか、村の人は実によく知っている。家族構成も、その家のさまざまな問題も、いい意味でも、悪い意味でも、隣近所にはよく知られているようである。

また、行政とNGOが住民参加によって作り上げてきた、HIV感染で社会的に排除されていた感染者およびその家族の共同体への再統合と、地域

の再生を図る活動のなかで、感染者グループや教員などが行政区の代表とともに、HIVの影響を受けた子どもの情報を交換し合い、経済的に援助する仕組みが行政区単位で作られてきた[33]。以上のような点で、近隣への関心は低くないものと考えられる。

第二節　パヤオ県ムアン郡Ａ小学校の絵の評価

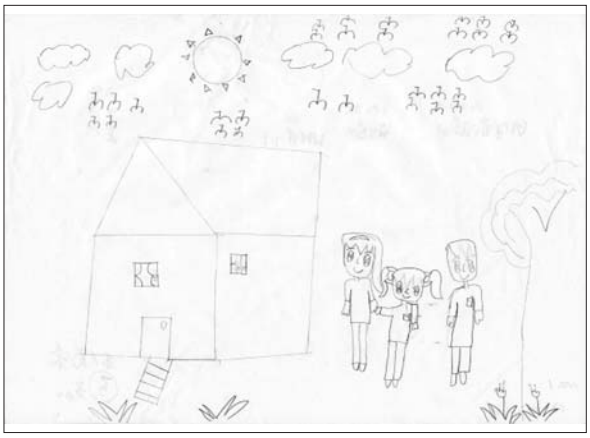
三沢氏によれば、今回調査を実施した小学校のなかで、このＡ小学校が経済的にいちばん豊かな印象を受けたという。しかしながら、1984年にはじめてのHIV感染者が確認されて以来、バンコクなどに出稼ぎに行っていた多くの働き盛りの人々が、HIVに感染し最終的に故郷の村で亡くなってきた。そのために老親と子どもが残されるという家庭が多く存在している。

今回絵を描いてくれた児童のうち、家庭状況に問題があると思われるケースは全部で14あり、全体の28％を占めた。そのうち両親が離婚はしていないものの、母親の行動に問題があると思われるケースが2、両親ともに出稼ぎ1、残り11ケースはひとり親で、死別3、離別８となっていた。また、これら全てのケースで、両親と暮らしているのは１、父4、母３、祖母4、祖父１、曽祖母１であった。全ての子どものうち、６人はラックスタイ財団と感染者のボランティアが実施する子ども活動[34]に、現在も参加しているか、かつて参加したことがある子どもたちであった。

家庭に問題のあると思われる子どもたちの状況と絵を以下に示す。

《家庭状況に問題のある子どもたち》

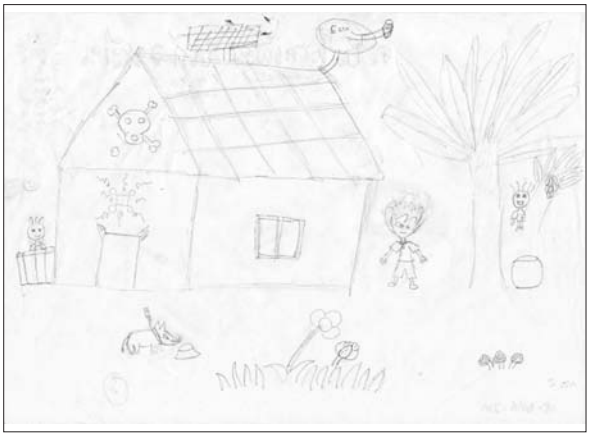
No. 1



No. 1　６年女子

父親はバンコクで働いていて、母親はエイズで死亡。本人も母子感染し、毎週水曜日に診察を受けながら、薬を服用しており、現在は祖母といっしょに暮らしている。祖母は行政主導で実施している村の貯蓄グループに参加している。祖母は孫のHIV感染については、本人に話していないので知らないと思っているが、周りの子も、本人も既にそのことは知っている。物静かな子どもで、踊りが好きだが、陽気な性格ではない。勉強は普通。RTFとPHAのボランティアが実施する子ども活動に参加している。

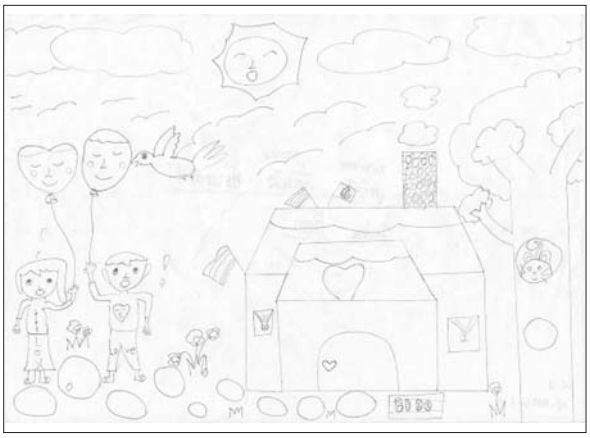
No. 2



No. 2　６年男子

父と住み、隣の家に住む祖母に面倒を見てもらっている。父や祖母は村のさまざまなグループには全て入っていると思われる。村の運営委員にもなっている。母親は金遣いが荒く、こちらでの暮らしがいやになるとバンコクに出稼ぎに行き、気が向くと帰ってくるという暮らしぶりで、現在はバンコクで働いている。バンコクには愛人がいるらしく、この男性との間に生まれた妹も、母と一緒にバンコクに行った。RTFとPHAのボランティアが実施する子ども活動に参加している。

No. 3



No. 3　５年男子

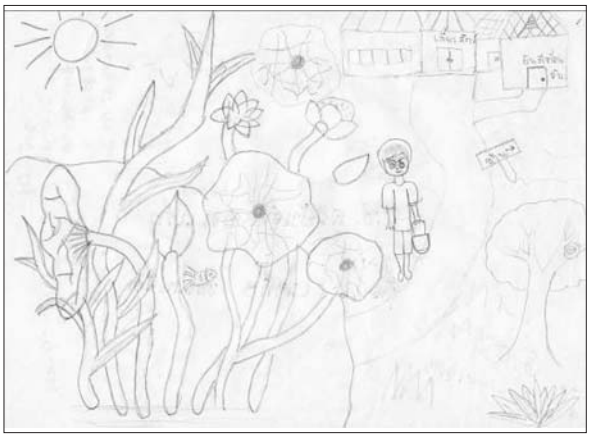
両親が離婚し、現在は母、祖父、本人の３人で暮らしている。

No.7

No.7　6年男子

父親は麻薬関係で殺害されたようである。母親は再婚しているが、家で一緒には暮らしていない。母親は酒好きで、あちらこちらと渡り歩き、あまり子どものところには戻ってこない。酒飲みの祖父と一緒にいる。本人は、あまり言うことを聞かない子どもだが、機転は利く方である。ゲームが好きで、スポーツ選手になりたいと言っている。

No.8



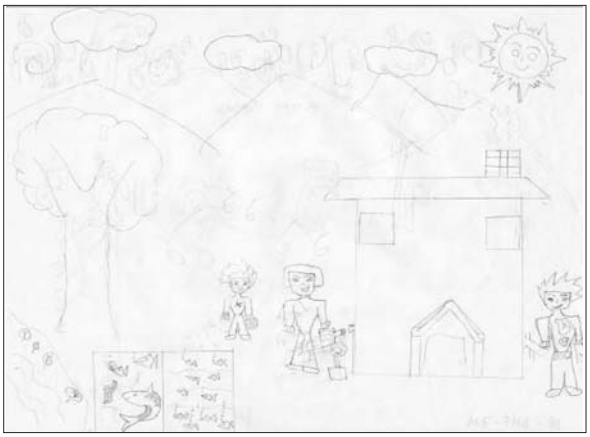
No.8　6年男子

両親は離婚し、母親はチェンマイに住んでおり、父と二人暮らし。父親は男女どちらとも性的な関係を結んでいるようである。父親は、朝、市場でものを仕入れ、それを別の場所で売って生計をたてているため、朝から子どもにかまっている時間がなく、帰りも遅くなるという。本児は、父に言いつけられた仕事が出来ていなかったり、間違っていたりすると思いきり叩かれている。

学校では、授業中に説明をしていても興味を持たず、注意をしてもあまりきかない。そのようなことが何度もあるという。責任感もない。ゲームが好きで、同じような仲間のグループに入っている。また、父親が見ているアダルトビデオを、父が不在の時に見ることもあるようだ。その内容は、男性同士の関係という内容である。

村では親子とも、近隣においてあるものを勝手に取る人物として認識されている。また、母と一緒にチェンマイに行った弟がいたが、事故で亡くなっている。RTFとPHAのボランティアが実施する子ども活動に参加している。

No.14

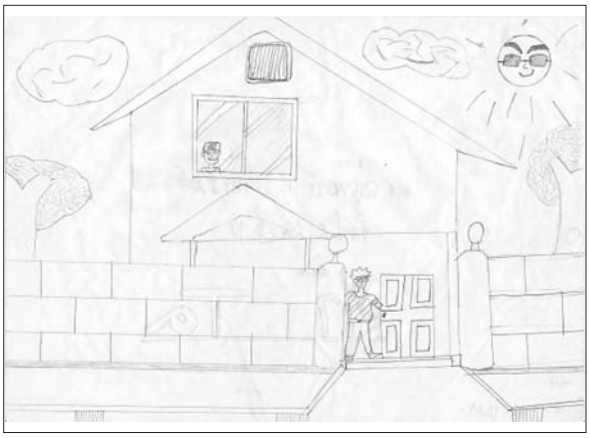


No.14　5年男子

父母と暮らしている。姉は結婚し家を出たため、三人暮らし。両親はもともとこの村の出身ではなく親戚もいないが、ここに家を建てて暮らしている。母親は村の貯蓄グループに参加しているが、酒を飲むと何を言っているのかわからなくなり、そのような状態になると、父親が母親に暴力をふるい、本児はそれを仲裁している。

以前は姉がいて二人で仲裁できたが、今は一人となったため、プレッシャーを感じている様子とのこと。学校では授業に関心がなく、騒がないが、言うことも聞かない。本人に聞き取りをする間中、激しいチックがみられた。RTFとPHAのボランティアが実施する子ども活動に参加している。

No.19



No.19　6年男子

両親は離婚し、父と祖母と3人で暮らしている。あまりしゃべる子ではない。とても面倒くさがり

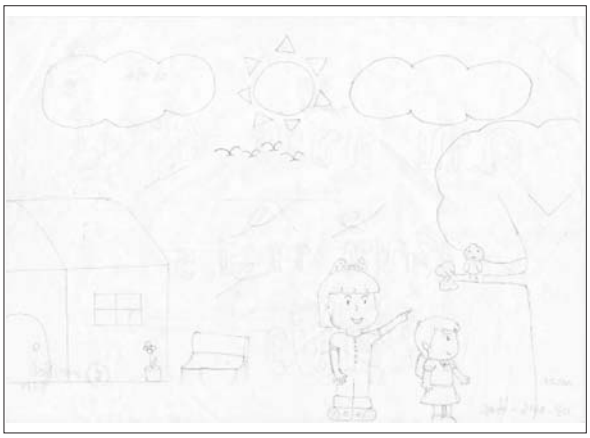
だが、友達は普通にいる。父は酒がけっこう好きで、暴力をふるったりすることはないが、経済的にかなり貧しく、ひとの土地を借りて農業をしている。

No.21

No.21　５年男子

曽祖母と住んでいる。一緒に住んでいた祖母は最近亡くなった。曽祖母は、ヤミ宝くじのようなことをしている。両親は出稼ぎに行っており、あまり家にいない。母親は学校に行っておらず、文字が書けない。住んでいる家は古くて、よく洪水の被害にあう。今にも壊れそうな家で、経済的にも恵まれていない。

No.23



No.23　５年女子

両親は離婚していて、今は父方の祖母と住んでいる。父は以前窃盗で捕まり服役していたが、現在は出稼ぎに行っており、あまり家にいない。母は妹を連れて東北タイに行ってしまった。家の手伝いをよくする子どもで、問題のある子ではない。RTFとPHAのボランティアが実施する子ども活動に参加していたが、最近はあまり出てこない。

No.34　５年女子

父は死亡。感染者グループのリーダーによれば、

No.34

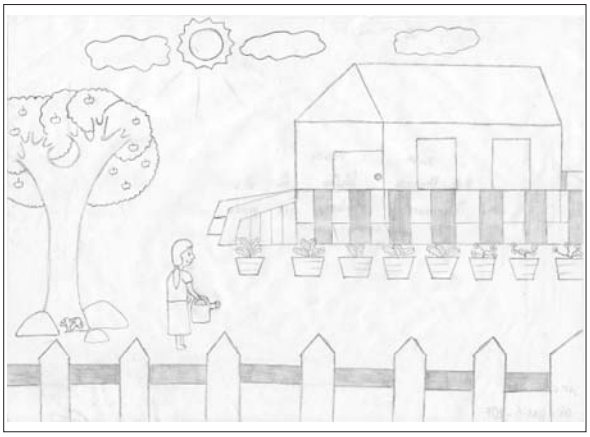
母親は、HIV に感染しており、最近感染者グループに入ったが、病院から退院してきたばかりで体調がすぐれない。近所が密集している地域に住んでいる。学校の成績はあまりよくない。

No.37

No.37　６年女子

父、祖母の３人暮らしで、他に兄弟はいない。本人が幼いころに両親は離婚しており、祖母が母親の役割を担ってきた。勉強には関心があり、よく出来る。しかし、あまりしゃべらず、祖母は本人を外に出さず、他の子と遊ばせないようにしている。

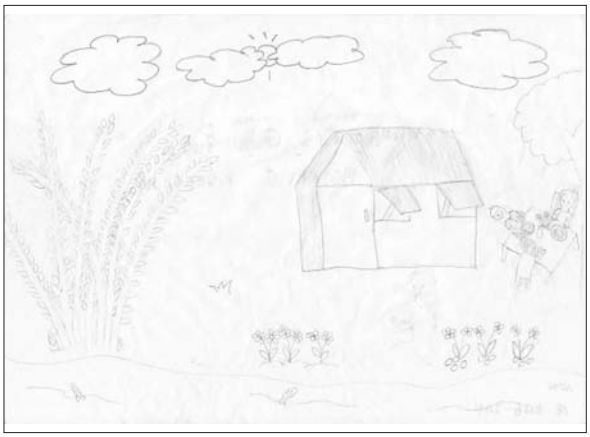
No.41



No.41　6年女子

両親は離婚している。小さな家に祖母と叔父とで暮らしている。父は再婚し、同じ村の離れた場所に、新しい母と幼い娘と暮らしており、父は毎朝、その娘を祖母の家に預けに来る。内気で家にいることが多い。

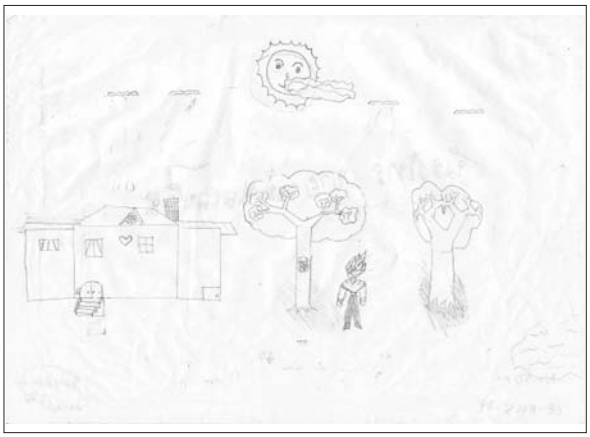
No.46



No.46　6年女子

両親は離婚し、祖父母と暮らしている。

No.50



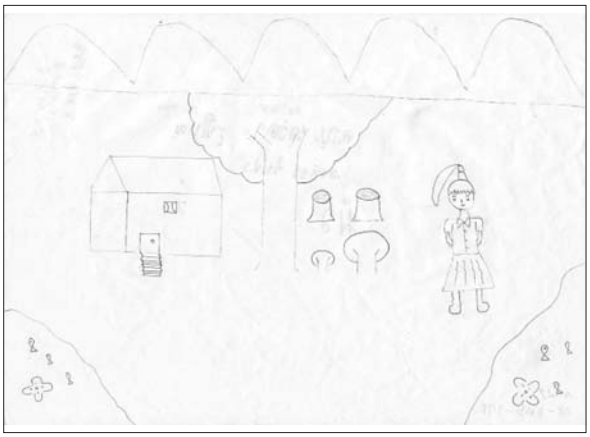
No.50　5年男子

父はおらず、母、祖父、祖母という家族構成。母は、村の貯蓄グループ、婦人グループ、村落基金グループのメンバーである。祖父母は果樹園に泊まることが多い。母はバンコクに行って妊娠して帰ってきた。また、母は交通事故で足の骨を折り、傷は治ったがまだ普通に歩けない。経済的には貧しく、魚を釣って多くとれたら売ったり、おかずをつくって市場で売ったりという簡単な商売をしている。本人はゲームにはまっており、母は子どものことが好きで甘やかしている。RTFとPHAのボランティアが実施する子ども活動に参加している。

《問題を指摘された描画》

今回Ａ小学校で採取した描画のうち、まったく家庭環境などの情報を得ないまま大まかに見た段階で、問題がある絵として三沢氏から指摘を受けたのは、次の３枚で、彼らの家庭状況は以下の通りである。

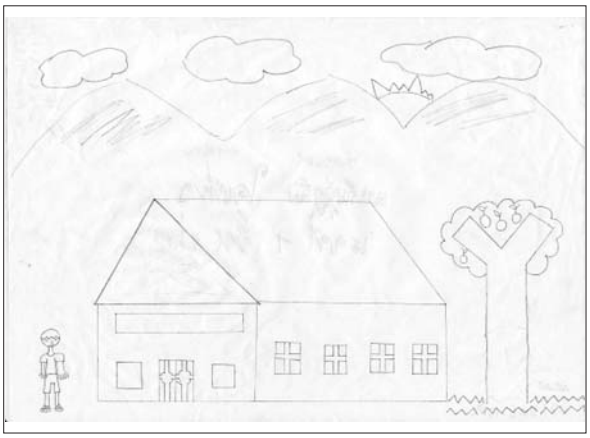
No.29



No.29　5年女子

両親、祖母と暮らしている。父は村落委員を務めており、村の堆肥グループ、貯蓄グループにも所属している。本人は頑張って勉強しているようだが、成績はよくない。経済的にも恵まれておらず、家が壊れそうになって建て直したが、小さな家である。

No.30



No.30　6年男子

両親、妹と暮らしている。母は金貸しのようなこともしている。祖父は県議で、村の顔役である。勉強は出来ない。自分に自信がなく、いつも誰かを頼りにしている。

No.49　5年男子

両親、姉、弟と暮らしている。母は村の貯蓄グループ、村落基金グループに入っている。本人は、やんちゃで言うことを聞かない。マンガチックな

No.49

ものが好きで、他人からの注意を引いていたいタイプ。クラスの級長になりたがっているが、やんちゃなところが災いしてなれていない。家には車があり、商売をしている。暮らしむきは普通。

三沢氏から指摘された子どもたちは、いずれも両親が揃い、経済的にも問題があまりない家庭で育っており、厳しい家庭状況で育っている子どもたちの絵は、特に問題を指摘されたものではなかった。もちろん、より綿密な分析をした場合では、何らかの問題を読み取ることは可能ということだったが、全体を大まかに見た段階では、特に問題のある絵とはみなされなかった。全体的にこの小学校の子どもたちの絵は、かつての日本で見られたように豊かで安定した絵で、子どもたちの置かれている厳しい家庭状況の割には、心の育ちは順調であると言えよう。また、半数近くの子どもが、RTFとPHAグループが実施してる子ども活動の経験があった。

第三節　コンケン県ノンルア郡Ｂ小学校・Ｃ小学校の状況

Ｂ小学校は、コンケン県Ｂ行政区を構成している13村のひとつであるＢ村に住む子どもたちが通っている小学校で、幼稚園児21名を含む68名が在籍している。校舎は田舎の分校といったイメージの平屋建て木造長屋が２棟並び、コンピュータ室はおろか図書室さえなく、運動場は石が散在している状態である。教室には電灯がないため、子どもたちは開け放った木製の窓から差し込む明かりの下で勉強している。また、幼稚園から小学６年生までが通う小学校にもかかわらず教室は５室しかなく、小学校の２・３年と５・６年はそれぞれひとつの教室で学習することを余儀なくされているのである。教師の数は校長先生を含む６名で、同行政区内の他村に廃統合される可能性があることから、存続を願い村人や教師たちが行政へ継続して働きかけている。

Ｂ小学校

Ｃ小学校

今回調査に協力いただいたのは６年生７名、５年生９名、４年生12名の合計28名である。５・６年生の複式学級の担任は女性で51歳、４年生の担任は女性48歳といずれも長年にわたりこの小学校に勤務し、児童の家庭のみならず村人たちとの親交も深く頻繁に情報交換をおこなっている。

児童の家庭は全世帯が農業従事者であるが、大半が小作農のため収入は低く農閑期には工場で稼動することにより生計をたてている。また、調査対象児童28名のうち２名の父親だけがバンコクへ出稼ぎしている。家庭状況についての聞き取り調査を担任にしたところ、経済的に問題がないと思われる家庭は父親がバンコクへ出稼ぎにいっている２家庭だけであり、残り26名の家庭は貧しく、とりわけ５名の児童については非常に貧しい家庭であるとの回答であった。児童の多くが鞄を持っておらずノートと鉛筆をそのまま抱えるように持ち通学し、高学年の児童がズックを履いてくるようになったのもここ数年のことで、それまでは裸足が目立っていたほどであることからも経済状況

が理解できよう。施設設備も十分に整っておらず、家庭も経済的に厳しい状態ではあるが、学校の運営や教育に関して村長や世話役、そして住民たちが学校に集い、校長や先生と一緒に教育方法の改善や質の向上を図ろうとしていることが窺え、村全体が協力して子どもたちの教育にあたっている学校であるといえる。

次に調査を実施したのがＣ小・中学校で、Ｃ行政区10村のうちの７村に暮らす子どもたちが通っている。幼稚園から中学校までを併設するＣ小学校は、幼稚園18名（年中・年長クラス）、小学生173名、中学生85名の児童・生徒総数278名でＢ小学校と比較すると約３倍の規模の学校である。児童数ではＢ小学校の３倍の規模であるが、施設設備はその数倍ともいえるほど整っている。コンピュータ室や図書室を備えており、コンピュータは休み時間に自由に使うことができる。また、校舎はコンクリート２階建ての立派な建物が５棟あり、運動場は整備されている。農村の小学校教員に対し行われたインタビュー調査結果において[35]、「施設設備が不備である」と76％の教員が指摘していることから考えると、この学校は農村部の小学校にしては施設設備が非常に整っているといえよう。

この学校で調査に協力いただいたのは６年生30名で、担任は３年前に赴任した45歳の女性である。ただ、６年生になってから新たに担任になった方であり、子どもの家庭状況については数回にわたる家庭訪問をとおして詳細な情報を把握していたようであるが、学校での様子について訊ねるとよくわからないこともあり、聞き取り調査の時には前任者にも同席していただいた[36]。子どもたちの家庭の大半は農漁業従事者であるが、Ｂ小学校ではなかった市場での物売りや商業を営むといった家庭もあった。経済状況は、30名のうち33％にあたる11名の家庭は特に問題があるような状態ではないということであった。残り19名のなかで４名の児童は非常に貧しい家庭であるとのことだが、うち３名は祖父母に養育されていた。同様にＢ小学校で非常に貧しいとされる児童５名のうち３名が祖父母、あるいはそのいずれかに養育されており、１名はひとり親、もう１名はひとり暮らしという結果であった。このことから、高齢で労働力に乏しい祖父や祖母が生活費を賄っている家庭ほど、経済的に苦しい生活を送っていると考えられる。

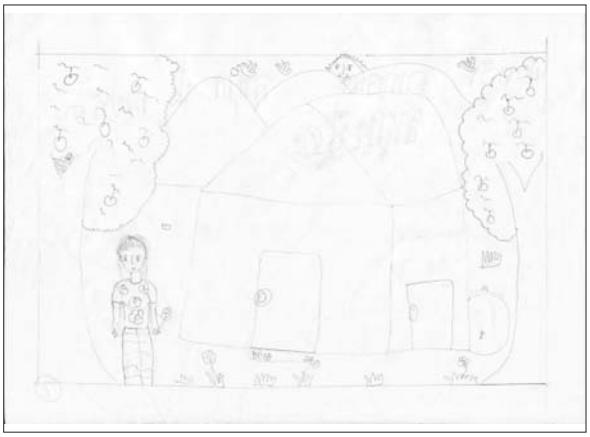
比較的豊かな家庭の子どもが多いと思われるＣ小学校であるが、児童30名のうち約23％にあたる７名の父親あるいは母親が出稼ぎ労働者であり、Ｂ小学校の７％（28名のうち２名）の約３倍にあたる。出稼ぎ先も海外への出稼ぎが４名でバンコクの３名を上回っている点も特徴的であり、Ｂ小学校より経済的に豊かな家庭が多いことを裏付ける要因ではないだろうか。先に述べたとおり、Ｂ小学校では出稼ぎ労働者を親にもつのは28名のうち２名だけであった。一方、ひとり親（死別を含む）の子どもが多いのはＢ小学校のほうで、全体の約29％は両親が離婚あるいは父親を亡くしているが、Ｃ小学校のひとり親率は約13％と低かった。学校の施設設備や家族の成員、家庭の経済状況などにおいて良好な環境下にあるのはＣ小学校の子どもたちであるといえる。しかし、７村の子どもたちが通う学校であることも関係していると考えられるが、Ｂ小学校で確認できたコミュニティ的な教育機関といえる要素をＣ小学校は有していないと思われる。果たしてこのような教育環境や家庭環境が、子どもの人格形成や心の発達過程において影響を与える要因と成り得るのであろうか。

第四節　コンケン県ノンルア郡Ｂ小学校・Ｃ小学校の絵の評価

この２つの小学校で特に家庭状況に厳しさを感じた児童は、以下の通りであった。

Ｂ小学校

№.５



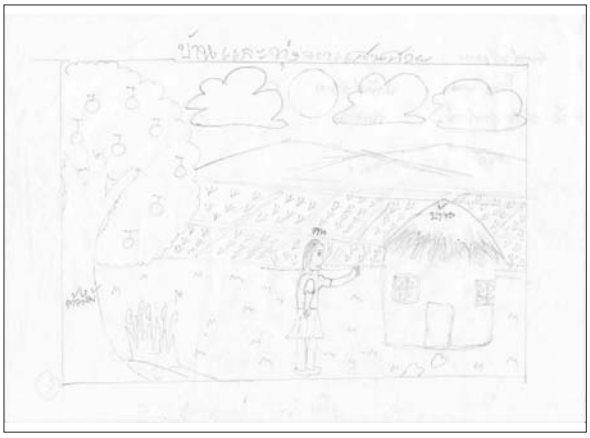
№.５　６年女子

2006年に父親を病気で亡くし、小作農の母親、兄と一緒に暮らしている。兄は母親の前夫の子どもであり、本人の父親とは異なる。

№.７　６年女子

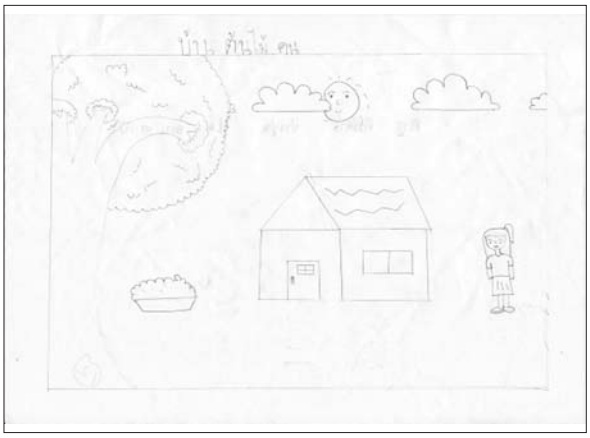
両親は離婚後、父親は再婚し別世帯をもっている。さらに、母親も再婚して夫と二人暮らしをし

No. 7



ているため、現在は家族４人で暮らしていた家にひとりで住んでいる。14歳の兄がいるが、お寺で生活している。父親が数カ月に１度程度様子をみにくるくらいで友人宅にお世話になったりすることが多く、家族より近隣住民が面倒をみているといっても過言ではない。先生方も気にかけているそうだが、特に心配・問題はないとのこと。

No.12



No.12　４年女子

両親は離婚し、それぞれに再婚しており、子どももいる。本人は、小作農をしている祖母、おじ、おばと４人で暮らしている。

No.14

No.14　５年男子

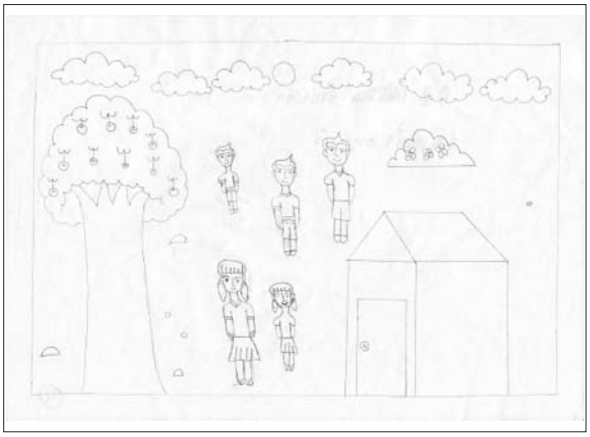
両親は離婚し、父親は出稼ぎに行っており、母は再婚して別のところで暮らしている。本人は、20歳の姉夫婦とその２歳の子どもと暮らしている。

No.19

No.19　４年男子

父親は母親が妊娠した後に失踪した。母親は本人を出産後に祖父母に預けバンコクへ行き再婚した。父親にあったこともなく、母親は滅多に帰ってこない。祖父母と暮らしている。読み書きができず、総合的に成績が非常に悪い。

No.21



No.21　５年女子

両親は離婚し、現在は工場勤めの母と義父と暮らしている。

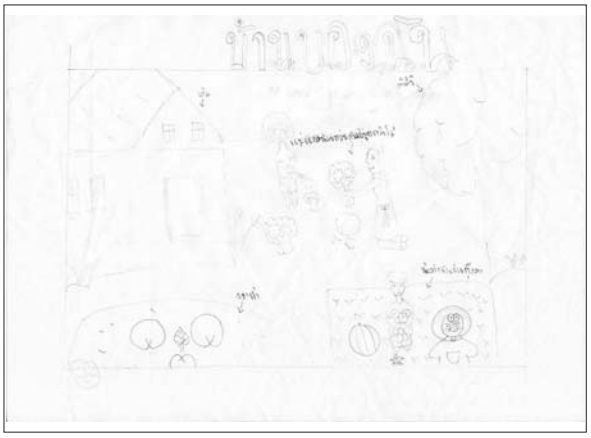
No.25　５年女子

両親は離婚し、母と義父とともに暮らしている。実の父親は小作農をしている。

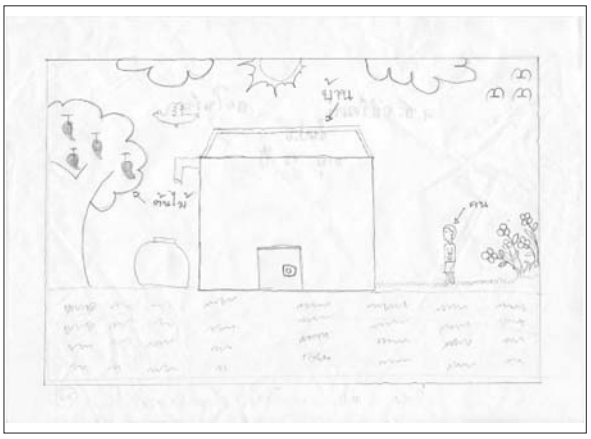
No.28　６年男子

３年前に父親がコラートで事故死し、母親と暮らしていたがその母親も現在は再婚しコラートで生活している。本人は祖父と３年生の弟と一緒に暮らしている。

No.25



No.28



Ｂ小学校で描画テストに参加してくれた28名の子どものうち、家庭に問題があると思われるケースは８ケースで、全体の29％にあたった。内訳は、離婚５、父親死亡２、父親失踪１となっており、そのうち両親ともに再婚しているが一緒に暮らしていないケースは２、母親が再婚したケースは５であり、そのうち現在どちらかの親とその新しい配偶者と一緒に暮らしているのは２ケースだった。再婚は高い確率で行われ、子どもを残して新しい配偶者と暮らすという選択が多くみられた。またこの８ケースの中で、現在誰と暮らしているのかをまとめると、母親３、祖父母１、祖父１、祖母１、姉１、ひとり暮らし１であった。ひとりで暮らしているのは、６年生の女子で近隣のインフォーマルなネットワークが、彼女の暮らしを支えている。

Ｃ小学校（Ｂ小学校よりの通し番号）

№30　６年男子

父親は海外への出稼ぎ労働者で、父親が戻ると母親が出稼ぎにでるという。３人兄弟の末っ子で明るく楽しい子で友人も多い。先生方は本人をゲイだという。学校行事のときは必ず女装してくる。

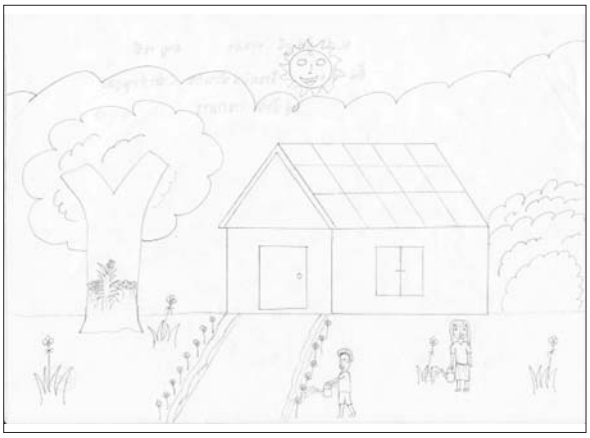
No.30

No.31

№31　６年女子

父親は韓国へ出稼ぎしているが、母親は乳癌で寝たり起きたりの生活であるという。非常に厳しく育てられており、きちんと躾けられている。いつも注目を浴びたいという思いがあり、中心的な存在になりたがる傾向が強い。姉と妹がおり、妹には厳しいという。

No.40

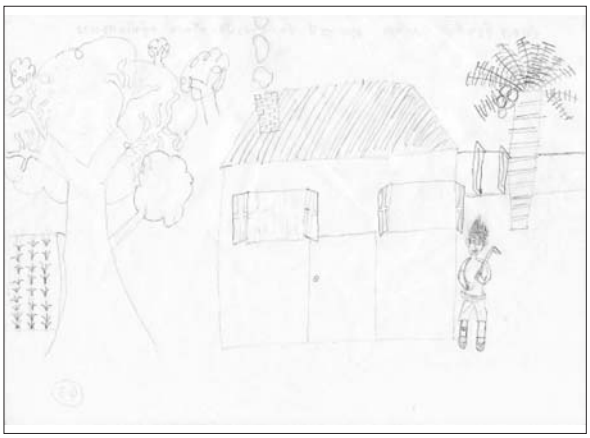


№40　６年男子

両親は10年前に離婚し、父親は再婚してバンコクに住んでいる。母親はバンコクへ出稼ぎに行っており、祖母の妹と一緒に暮らしている。生活費

はバンコクで働いている母親が負担している。勉強もでき友人関係も良好であるが、心と裏腹な行動が多く先生方も気になっているという。悲しいときには笑うという子。

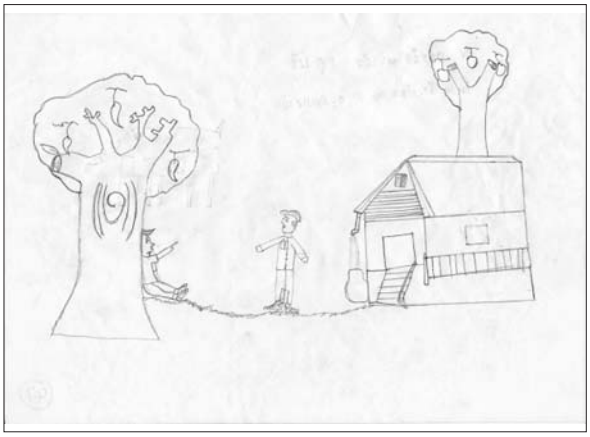
No.43



No.43　6年男子

両親は離婚し、母親は再婚してバンコクに住んでいる。父親の所在は不明。本人は祖父母と生活しており、生活費は祖父母が負担している。経済状況は大変厳しい。突拍子もない行動をとることがある。

No.47



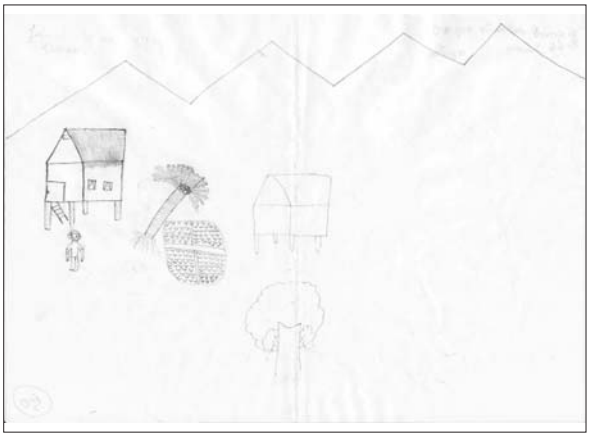
No.47　6年男子

両親は離婚し、父親・母親はそれぞれバンコクで暮らしているということだけがわかっており消息不明。3人兄弟の末っ子で祖父母と一緒に生活しているが、父親・母親からの仕送りは一切ないうえ祖父は寝たきりで祖母が市場で物売りなどをして生計をたてているという。経済状況は大変厳しい。性格はよいが勉強はできず、ひきこもりの傾向があるという。

No.50　6年男子

両親はいるが別居していてほとんど帰ってくることがないという。祖父・姉と一緒に暮らしている。

No.50



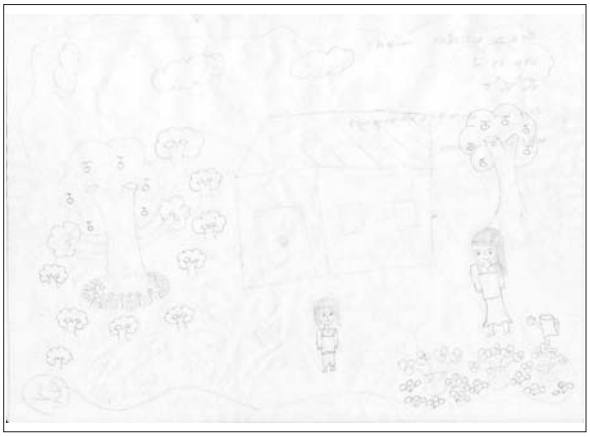
るが非常に貧しい。気性が激しく攻撃的で先生のいうことも全く聞かない。勉強もできない。以前ナイフを学校に持ってきたこともあり、「切れるかも」という恐れのある子だと先生方は心配していた。本人の兄も学校にナイフを持ってきて騒動になったことがあるという。

No.51

No.51　6年女子

両親は離婚しており、父親の所在は不明。母は再婚して子どもも生まれた。母が海外へ出稼ぎに行っていたため、経済状態は少し豊か。男性的な女性である。

No.52



No.52　６年女子

父親はバンコクで建設作業員として働いている。母親が見栄っ張りな人で、お金がないにもかかわらず、新しいものや綺麗な服を子どもに買い与え、お金持ちの子どものようにみせたがる。子どもたちはそういうものを望んでおらず、姉は母親から逃げるように17歳でコンケン市へ行き、３回結婚し、３回離婚した。本人も母親を嫌っており喧嘩が絶えない。

Ｃ小学校で家庭状況に問題があると思われたのは、８ケースであった。このうち両親が揃っているものの、別居してほとんど家に帰らないというケースが１、常に両親のどちらかが出稼ぎに行くというケース１、父親が海外に出稼ぎに行っていて母親が癌を患っているというケースが１、母親の行動に問題があるケースが１であった。離婚家庭は、４ケースであった。このうち１ケースは母親が再婚して、子どもも新しい配偶者とともに暮らしている。現在両親と暮らしているのは2、母親１、どちらか１、祖父母２、祖父１、祖母の妹１である。

Ｃ小学校では、就労の場が確保されているためか、離婚家庭が少ないものの、出稼ぎによって家族の福祉的機能に問題が生じているケースが目立った。また、先生方が子どもの家庭の状況を詳細に把握しており、気になる子どもの家庭には度々たずねていったり、保護者に学校にきてもらったりするなどして情報交換を頻繁におこなっている様子であった。

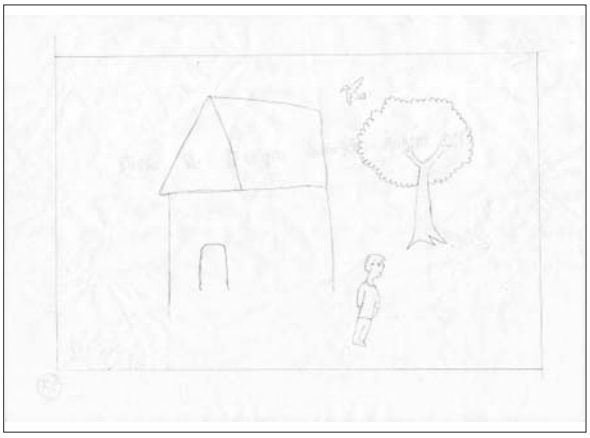
《問題を指摘された描画》

今回Ｂ、Ｃ小学校で採取した描画のうち、問題がある絵として三沢氏から指摘を受けたのは、家庭状況に問題がある№50の絵に加えて、以下の２枚で、彼らの家庭状況は以下の通りである。

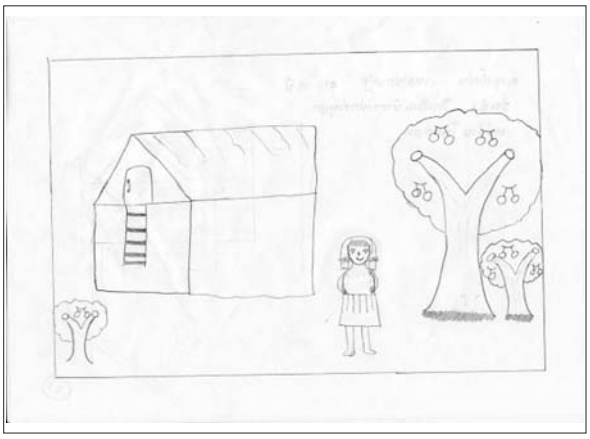
No.24　４年男子

両親揃っており、双子の弟は勉学・運動ともに優秀な成績で、友人も多い。何をしても弟に劣っており劣等感があるのではないかと思われる。気になる子だったのでしばらく様子をみていたが、非常に大人しく物静かな印象をうけた。弟と会話をしている姿をみなかった。友人関係は普通というが、友人とわいわい騒いでいる姿もみなかった。

No.24



No.33



No.33　６年女子

両親揃っており、父親は建設作業員、母親は工場で働いている。非常に頑固でわがまま、ケチで自分勝手で思いやりがない。自ら進んで何かをするということはなく、先生も手を焼いている。

三沢氏から指摘された子どもたちは、ここでも、いずれも家庭的に特に問題がない状況で、厳しい家庭状況で育っている子どもたちは、№50以外は誰も指摘を受けなかった。Ｂ小学校は貧困が家庭状況に影を落とし、離婚率が高く、また再婚率も高かった。しかしながら、子どもたちの置かれている厳しい家庭状況に対して、心の育ちはしっかりと感じられるものが多かったと言えよう。これは、この地域が伝統的な農村社会のコミュニティを維持しているからなのかもしれない。

Ｃ小学校においては、Ｂ小学校に比べて経済的に豊かな半面、豊かであり続けるために出稼ぎを繰り返す、子どもの教育に入れ込んでしまうなどの家庭が見受けられた。

第四章　子どもの育ちを支えるもの

第一節　普通に育つタイの子どもたち

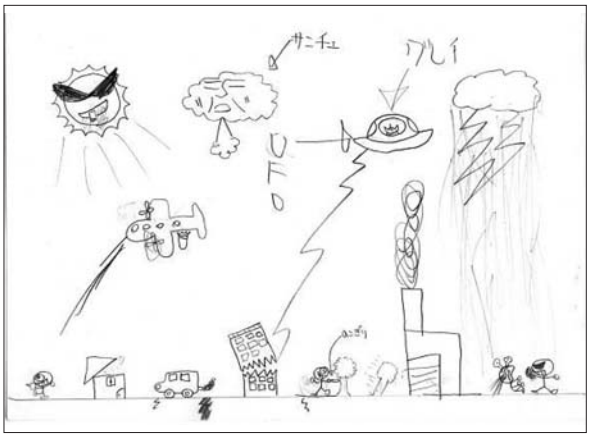
第三章では、タイ北部および東北部の農村部の小学生の家庭状況と、彼らの描画に表れた心の発達の関連についてみてきた。ここで明らかになったことは、家庭に問題を抱えている子どもたち、すなわち親と暮らせない、親が酒乱や性関係が乱れている、経済的に大変苦しい、などの状態にあっても、それほど大きな問題が見られなかったということである。

一方で、三沢氏から心の発達に関して問題があると指摘を受けた子どもたちは、そのほとんどが両親が揃っており、さほど貧しい家庭でもなく、ただ周囲の期待がプレッシャーになっていたり、兄弟間で比べられて劣等感を持っていたり、子ども自身に何らかの発達上の問題が考えられたりというケースであった。

三沢氏によれば、今回われわれがタイで得た描画は、「やや統合的」「明らかに統合的」「遠近感が中」「スケッチ風の線」「現実的な描写」「横長の家」、さらに「枝の描写」などの繊細な自然の描写が多くみられた点で、1980年代初めに三沢氏が長野県での調査によって得たものと同じレベルのものであったという。以下、1997～99年の子どもたちの絵の問題として、①攻撃的・破壊的な絵の増加、②非現実的な絵の増加、③問題の多様化・両極化、④小さく暖かみのない「家」の増加、⑤簡略化された人間像の増加、⑥高学年での発達の停滞などの指標に沿って、日本の子どもの描画と、タイの子どもの描画を比較してみる。

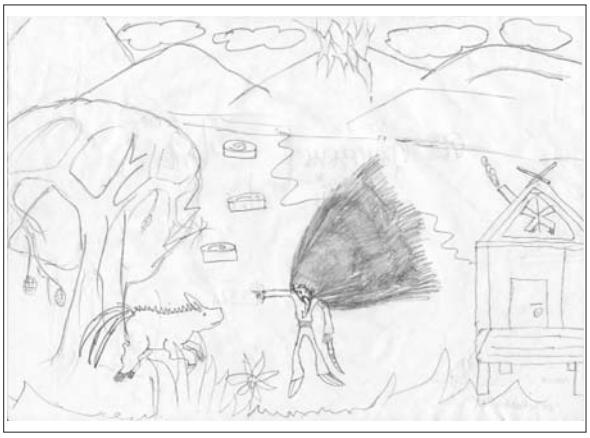
①攻撃性・破壊性の比較

日本



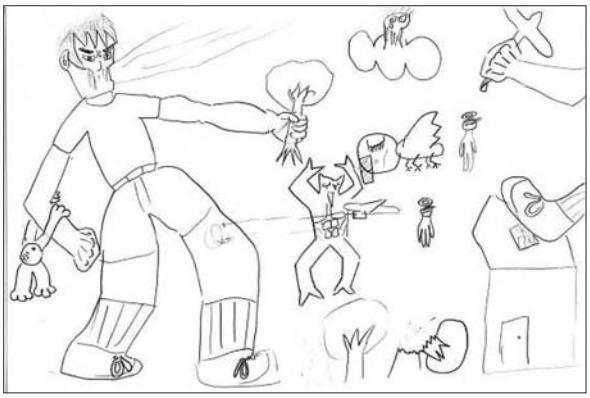
日本の子どもの絵には、左上のように絵全体が攻撃的・破壊的な絵がかなり見られるようになっているということだが、タイの絵のなかでは、一番激しい攻撃性を感じたものであっても、この程度であった。人物は猟師で狩りをしているところを描いている。また、木にぶら下がっているのは爆弾である。この絵を描いた少年は6年生の男子で、一時期ゲームセンターでのゲームにはまり、今は厳しく両親から監視を受け、ゲームを制限されているという。人物などの表現は、アニメやゲームの影響を受けていると思われるが、日本の絵と比べると、写実的、現実的で年齢相応の発達を遂げた表現が出来ている。

タイ

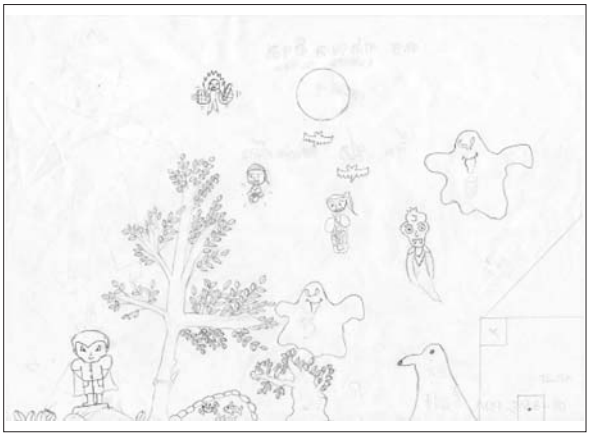


②非現実的な表現の比較

日本



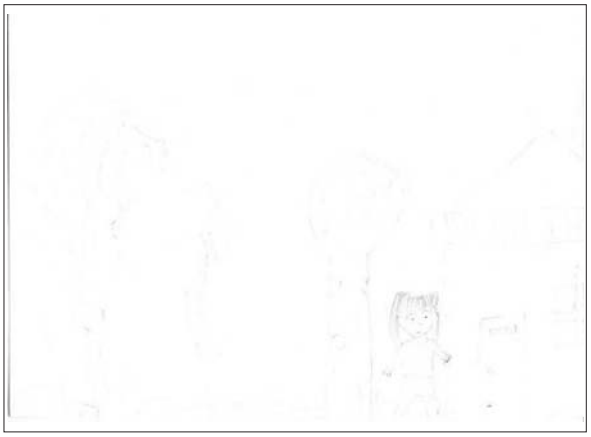
タイ



上の絵は、巨人が木や人や家をなぎ倒しているところで、日本においては攻撃的・破壊的だけでなく、非現実的な絵が多くなっているが、タイの絵では、「非現実的」という意味において、唯一「おばけ」を描いたものがあげられるのみだった。しかし、この絵は、決して破壊的でも攻撃的でも暴力的でもなく、ファンタジーの世界を描いているように思える。

③ 問題の多様化・両極化について

日本：女子（弱）



日本：女子（強）

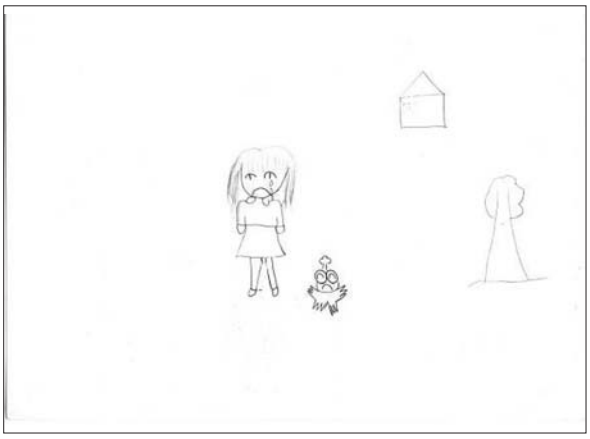
日本の場合、例えばエネルギー水準の低い子と高い子など、問題が多様化すると共に、両極端な絵が増えていて、バランスのいい“普通の絵”が減っているという現状があるが、今回のタイでは、筆圧の差についてもこの程度で、特に極端な絵はみられず、ほとんどの子どもたちが平均的な絵を描いていた。

タイ：女子（弱）

タイ：男子（強）

④家の比較

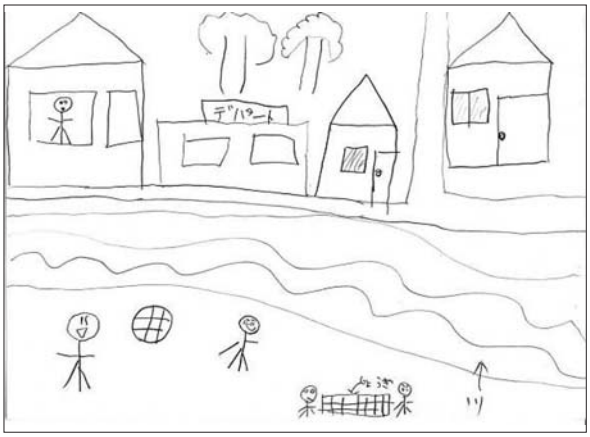
日本



日本の子どもたちの描く家は、上の絵のように小さく暖かみのないものが多くなっているが、今回の調査の中では、たとえ厳しい家庭環境にある子どもであっても、このように小さく、暖かみのない貧しい家を描いたものはまったく見つけられなかった。家は、中央部に堂々と描かれているものが多かった。また、この少女のように、泣いている人物は皆無だった。

⑤人間像の比較

日本



タイ

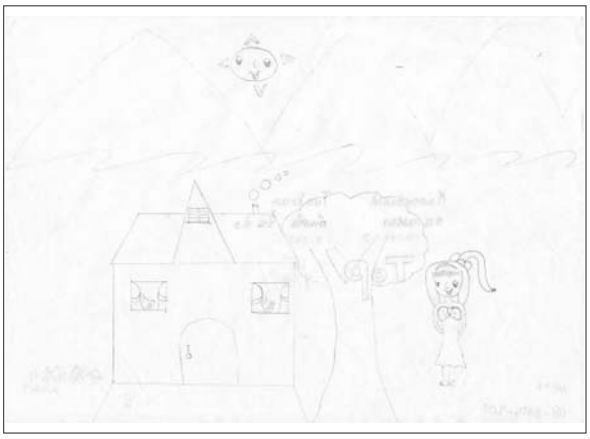
日本の絵は、人間像が記号化されたり、簡略化されたりした絵が増えており、自分や他者への実感が希薄化しているという問題が示されていたが、タイの絵で記号化された人物が描かれていたのは、先に三沢氏から問題が指摘されたＡ小学校№49の絵と、この絵の２点のみであった。本児は、クラスの委員長で、引っ込み思案なところがあるということであった。この絵は、以前訪れた山岳民族の村を洞穴の中から眺めているところである。人物は記号化されているが、全体的には遠近感があり、現実的で統合性もある。

⑥高学年での発達の停滞について

日本では、小学６年生の絵の中に右上のような幼い絵がみられ、全体的にみても1981年の小学生に比べると３年生レベルで発達が止まっているという問題が見られた。それに対して、今回のタイの調査では、1981年の子どもたちの絵に近いものが多く、特に発達の遅れは見られなかった。右上の絵は、木と家と人が羅列的に並び、家が一面で、大きさが釣り合っていないという点で選んだが、HIV感染した母と暮らしている児童の絵である。

日本

タイ



家の描写は一面であるが、地面との境がはっきりとし、窓や屋根は日本の絵とは比較にならないほど、細かく描かれている。また、木もしっかりと根を張り、枝ぶりも堂々としている。

以上のように、描画を通してみる限りは、貧困や家庭崩壊という厳しい現実にさらされながらも、日本の子どもに比べて、タイの子どもたちの心の方がしっかり発達していることが明らかになった。その差が、どのような環境の違いによるものか、以下に考察を加えたい。

第二節　「普通の発達」を支えるもの

先にも述べたが、三沢氏によれば、今回のタイの子どもたちの描画テストの発達レベルは、1981年に長野県の小学６年生を対象に行った描画テストとほぼ同じレベルの発達を示していた。言い換えれば、われわれが2008年に調査を行ったタイ北部と東北部が、1981年に長野県で小学６年生であった子どもを育てていた親と地域社会に似た要素を持っていたといえるのかもしれない。

三沢は、1981年以降の描画テストの変化を踏まえて、1960年代以降に生まれた世代の子育て環境

に大きな変化が生じたのではないかと指摘しており[37]、第二次大戦後の新憲法下で改められた「家制度」によって、それまで親族のつながりを大切にせざるを得なかった「直系家族制」から、カップルの裁量の幅が大きくなった「夫婦家族制」によって、第一に子どもが幼稚園や保育園に入るまでの母子がきわめて孤立した状態におかれていること、第二に母親がそれを望もうが望むまいが、子どもに対して独裁者になりかねないような位置づけになってしまうこと、第三に新米の母親が子育てに悩む時に、具体的にアドバイスしてくれる先輩の母親が身近に存在しなくなったこと等を具体的な問題点として挙げている。また、門脇は、第二次大戦直後にアメリカ占領軍の指導によって、抜本的に改正された教育制度の中で取り入れられた、経験主義的カリキュラムが、地域のなかで出会うさまざまな人との相互行為を伴いながら子どもたちの共同体験を基盤に展開されていたことの意義を指摘している[38]。そして、このような経験主義的カリキュラムは、高度経済成長期まっただなかの1960年代になると「這い回る経験主義」として排除され、系統だった知識の効率的な習得を重んじた「系統主義教育」にとって代わられ、受験競争が激化するなか、1970年代に入ると偏差値が登場し、1979年からは共通一次試験の登場によって、子どもたちの存在が、偏差値という学力のみの基準値によって語られてゆき、子育てもまたその影響を深くうけてきたのである。1981年の長野の子どもたちは、まだ地域にコミュニティが存在していた時代に、経験主義的教育カリキュラムで育った親達によって育てられていた世代だったと言えよう。

今回われわれが調査したタイ北部と東北部では、機械化されていない伝統的な農業が中心で、刈り入れ時期には、村総出で誰かの田んぼの収穫を助け合い、農閑期には、ひとのつてをたよりに現金収入の道をさぐり、雨期に大雨が襲うと共同で道路や田の整備をするという、互助的コミュニティを形成している。

また、村人のほぼすべてが敬虔な仏教徒であり、彼らは日々の暮らしで功徳を積むことは、自己の輪廻転生に重要な役割を果たすと信じており、毎朝托鉢に回る僧侶に供物を捧げることや、困っている人を助けること、あるいは自らが出家することなどによって徳が増えると信じている。月に何日かの仏日には老若男女が寺に集まって僧侶の話を聴き、寺の行事を支え合う。

冠婚葬祭などの行事では、人々が集まり飲食をともにすることが、主催者が功徳を積める行為のひとつとして解釈されているため、総出で炊き出しを行い、学齢期の子どもたちも役割を持って参加し、近所中の人が集まって儀礼が進められる。

また、子どもたちには家庭内での役割が与えられ、一家の大事な働き手として、家畜の世話や掃除、洗濯、炊事、親の商売の手伝いなどを日常的にこなしていく。そして、兄弟連れだって、寺や刈り入れの終わった田畑、家の周りの敷地などでよく遊ぶ。家庭にゲーム機があるのは、ほんの一握りの裕福な家庭のみであり、最近村に出来つつある民家を改造したゲームセンターに通っているのは、男子のみで、１時間30円ほどの小遣いを調達できる子どもたちに限られている。また、村には自動販売機はないため、お菓子を買うのも誰かとのやり取りが必ずある。

親たちは、農繁期にはほとんどが農業に従事し、子どもには日常的に親の働く姿が確認できる。農閑期には、山でタケノコを取って缶詰にしたり、内職をしたり、日雇いに出たりもする。なかには、バンコクやチェンマイで出稼ぎをしている親もいるが、年に数回は必ず地元へ帰省し、最終的には出身地に戻って来るケースがほとんどである。

このように、タイの北部、東北部では、日常生活のさまざまな場面において相互行為が展開されており、子どもたちもコミュニティの一員としてそこにかかわっており、子ども同士の群れ遊びや、家の手伝いなども、心の発達に大きな影響を与えていると考えられる。

また、HIV感染によって深刻な影響を受けた家庭の子どもが通うＡ小学校では、家庭状況に問題のあった子どものうち、半数が地元のNGOであるRTFと、村の感染者グループのリーダーが協働して実施している子ども活動に参加していた。10年ほど前に、筆者がこの行政区の感染者たちにインタビューしたころは、頼るものは親戚しかなく、経済的にも精神的にも追い詰められた状況に涙する人が多かった。その後、当事者グループが組織化され、行政区全体で感染者とその家族を支えるシステムが行政区委員会のなかに立ち上げられることとなり、肩を寄せ合って暮らしていた感染者達は、自信を取り戻し感染前には考えられなかったほどの知識とスキルを身につけて、現在では村の重要な役目を担う人たちとして共同体に再統合されている。このような経緯のなかで、自信をなくした子どもたちに、自立にむけた知識と自

信を取り戻させたいとはじめられたのがこの活動である。現在では、パヤオ県４箇所、チェンマイ県１箇所に広がりを見せている。ここには、これまでの伝統的な農村型のコミュニティとは異なる、新たなコミュニティが形成されようとしている[39]。このような活動も、直接的、間接的に子どもたちの「普通の発達」を支えているのではないだろうか。

おわりに

われわれが今回調査を実施したタイ北部と東北部にかかわるようになって、もうずいぶん長い時間が経過している。振り返れば、意識化された大人の話や、組織化された行政の制度や当事者グループの活動を通して、村を理解してきたつもりでいた。しかしながら、今回三沢氏のご協力によって描画テストを実施したことで、これまで目に見えて来なかったコミュニティの力を実感し、「ひとが育つ」とはどのようなことなのかをより深く理解できたように思う。またそれゆえに、母と子が孤立した社会で育てられた日本の子どもたちの苦悩と、問題の深刻さ、大人社会の責任の大きさも強く感じさせられた。

今後は、三沢氏に引き続きご協力をいただきながら、さらに詳細な描画の分析をすすめ、子育て支援の在り方に関する考察を深めていきたい。さらに、パヤオ県、コンケン県の子どもたちの心の育ちの豊かさを支えている具体的な要因に関しても考察を深め、近代化を急ぐタイ社会、子育て支援を急ぐ日本社会に還元することができればと思う。

謝辞

今回の研究にご協力いただき、ご多忙にもかかわらず、門外漢の私たちに温かい励ましと的確なアドバイスを下さった三沢直子先生に、調査に協力していただいたA、B、C、D、小学校のみなさまと、大好きな村の方々に、現地でコーディネイトをしていただいたRTF、CASのみなさまに、通訳をしていただいた川口さん、江澤さんに心からの感謝を申し上げます。

本研究は、本学地域総合研究所の2008年度特別研究の研究助成に基づく成果である。

[1] 家と木と人をいれて何でも好きな絵を描いてもらい、それらの相互関係を見ながら、画に投影されている自己と外界、意識と無意識などの被検者の心的状態を理解する方法。わが国では、Buckによって創始されたHTP法（家と木と人をそれぞれ別紙に描く方法）が精神医学の治療場面で使われ、次第にS-HTP法へと発展していった。詳細は、三沢直子『S-HTP法―統合的HTP法における発達的・臨床的アプローチ』（誠信書房　1995）を参照。

[2] 三沢は、『殺意をえがく子どもたち』（学陽書房　1998）のまえがきで、神戸須磨連続児童殺傷事件の報道に接して、『その少し前から、子どもの実態調査のために都内の小学校をまわって描画テストをとりはじめており、そのあまりの深刻な結果に、このような事件がこれから起こるのではないかと、ひそかに恐れていたからです。』と述べている。

[3] 門脇厚司『子どもの社会力』(岩波新書 1999)

[4] 三沢直子『描画テストに表れた子どもの心の危機　S-HTPにおける1981年と1997～1999年の比較』（誠信書房　2002）

[5] 門脇厚司は、コミュニティについて、「そこに住む住民がその地域に愛着を感じており、愛着ゆえにそこにずっと住んでいたいと考えていて、住んでいたいという永住意識があるゆえに、そこをもう少しいいところにしたいと思うようになり、そのような改善意欲があるゆえに、地域をよくする活動に加わって活動を続けている状態のことである。」と述べている。本稿で取り扱うコミュニティもこれに近い概念を指す。『子どもの社会力』（岩波新書　1999）

[6] 門脇によれば、「社会力」とは、「社会的動物ないし社会的存在たるに相応しい人間の資質能力」であり、「一つの社会を作りその社会を維持し運営していく力」という意味を持つ。

[7] 門脇は相互行為について「互いに、相手から働きかけられたその内容に影響されて行為を返し、相手が自分に何らかの働きかけをするその内容に影響を与える意図で相手に働きかけをする、という行為の交換のことであるといえる。」と定義しており、本稿でもこの定義を用いる。

[8] 2001年よりThaksin Shinawatra元首相が率いるタイラックタイ党が、大分県の一村一品運動を模範とし農村の伝統的小規模零細工業の育成を通じて零細農業家の現金収入の増加、地域の活性化を目指した政策

[9] タイ各地、及び隣接諸国の経済、社会開発および国民生活向上を目的に、CARE INTERNATI

ONALによって、1979年にCARE Thailandとして設立された。1997年CARE/Rakes Thai Foundationとして、タイの財団法人認可を受けた。主に、①自然資源保護活動、②農民の収入向上活動、③AIDS予防教育・ケア活動、④環境衛生教育をコミュニティと一体となって取り組んでいる。

[10] 三沢直子『S-HTP法―統合的HTP法における発達的・臨床的アプローチ』（誠信書房　1995）

[11] http://travel.phayaoprovince.net/En/index.htm、を参照した。

[12] 「Population and Housing Census 2000年」によれば、パヤオ県の人口は、男性251,019人、女性251,761人、合計502,780人、145,311世帯であり、１世帯あたりの家族数は、3.4人となっている。以下の人口構成についての記述は、同調査に基づいている。

[13] 池本幸生・武井泉「タイの地方間格差―労働移動から考える―」（松井範惇・池本幸生編著『アジアの開発と貧困』明石書店、2006年）

[14] NNN.ASIA 2008年５月６日（火）（http://news.nna.jp/free/news/20080506thb002A.html）

[15] 筆者の入江は、約10年にわたり、後述する同地域で活動しているNGOであるRakes Thai Foundation（以下RTF）を通じて、同地域への支援活動や交流、調査を続けている。また本学では2002年度から実施している学生を対象にした海外コミュニティサービスでも、毎年同地域を訪れており、筆者の入江・菅原も参加している。さらに、筆者の入江・菅原は、本学の開講師とともに2006年７月にも同地域で調査を実施している。記述の内容は、これらの時に実施した家庭訪問でのインタビューに基づいている。

[16] タイ北部の妻方居住性と財産相続については、以下の文献を参考にした。入江詩子「北部タイにおけるHIV/AIDS当事者および家族の現状と福祉課題」（『長崎ウエスレヤン短期大学紀要』第24号、2000年）、成末繁郎「北部タイ農村女性のライフサイクルと結婚」（丸山孝一編著『現代タイ農民生活誌』九州大学出版会、1996年）186～194ページ、水野浩一「日本とタイの農村社会－女性の地位－」（京都府立大学学術報告『人文』第19号、1967年）94～95ページ、竹内隆夫「タイの家族・親族」（北原淳編『東南アジアの社会学』世界思想社、1989年）229～234ページ、浅川美和子「タイ国における女性労働者の地位と役割及び社会政策の発展」（立命館大学国際関係学会編『立命館国際関係論集』）。

[17] 竹内同上論文、232ページ。

[18] 入江前掲論文、91ページ。

[19] 入江同上論文。以下、タイにおけるHIV/AIDSの広まりと引き起こされる問題については、入江詩子・菅原良子・開浩一「社会開発としての子育て支援事業のあり方をめぐって」（長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所『研究紀要』５巻１号、2007年３月）を参照。

[20] 有吉紅也「タイにおける取り組みと日本の協力」（『日本エイズ学会誌』Vol. 5 No. 3、2003年８月）195ページ。

[21] 入江詩子・菅原良子・開浩一前掲論文、59～60ページ。パヤオ県におけるHIV/AIDS感染者数については、筆者らが2006年７月１日から５日に行ったパヤオにおける聞き取り調査、及びその後RTFスタッフから入手した統計資料に基づいている。

[22] 詳しくは、入江詩子・菅原良子・開浩一同上論文、宮本英樹「JICAタイコクエイズ予防・地域ケアネットワークプロジェクト」（http://www.jichi.ac.jp/usr/tiik/kaigai/miyamotothai.htm）参照。

[23] 田中治彦『国際協力と開発教育』（明石書店、2008年）36ページ。

[24] 入江詩子・菅原良子・開浩一前掲論文60ページ、宮本前掲報告。

[25] 田中前掲書、29～40ページ。以下、タイ北部におけるNGO活動全般の展開については、同書を参照した。

[26] REFの活動についての詳細は、入江詩子・菅原良子・開浩一前掲論文、入江詩子「住民参加型福祉における主体形成に関する一考察」（長崎ウエスレヤン短期大学『地域総合研究所所報』第10号、2001年）を参照。また以下のRTF活動に関する記述は、同論文の他、RTFが発行している「コドモファンド通信」（創刊号・2001年８月～第16号・2008年12月）、2006年７月に実施したRTFパヤオ事務所のスタッフからの聞き取り調査における情報に基づく。

[27] タイでは1973年以降、地域ごとに日額最低賃金が設定されており、内閣の任命する政労使の代表15人の委員で構成される中央賃金委員会の審議によって定められ、地域別の改定は１月１日付けでほぼ毎年行われている。2002年以降、各地域の実情や物価上昇率が考慮され全国の平

均インフレ率に基づき決定されるようになった。(http://www.fact-link.com)

[28] P. Thira pong・飯塚敦・河井克之「タイ東北部の塩害調査とジグソー・ピーシス作戦」『土と基礎』、地盤工学会、2007年。

[29] 国際協力事業団「タイ首都圏と地方との地域間格差是正報告書」http://www.jica.go.jp、2006年５月９日。

[30] 高梨和紘研究会「タイ東北部におけるOTOPの現状」４－17頁 http://image01.wiki.livedoor.jp、2009年１月27日。

[31] 同上、22頁。

[32] 入江詩子前掲論文「北部タイにおけるHIV/AIDS当事者および家族の現状と福祉課題」。

[33] 入江詩子・菅原良子・開浩一前掲論文「社会開発としての子育て支援事業のあり方をめぐって」。

[34] ラックスタイ財団によるコドモファンドプロジェクトの一環として、HIVの影響を受けた子どもや貧しい家庭の子どもの支援のために、2003年から村の寺院の一角で行われている。詳細は、入江詩子・菅原良子・開浩一前掲論文「社会開発としての子育て支援事業のあり方をめぐって」を参照。

[35] 村田翼夫『タイにおける教育発展』東信堂、2007年、62頁。

[36] タイの小学校は新学期が５月下旬から始まり、調査を実施したのは９月であったため担任となってわずか４カ月しかたっていなかった。

[37] 三沢直子前掲書『描画テストに表れた子どもの心の危機　S-HTPにおける1981年と1997～1999年の比較』。

[38] 門脇厚司前掲書『子どもの社会力』。

[39] 入江詩子・菅原良子・開浩一前掲論文「社会開発としての子育て支援事業のあり方をめぐって」。